

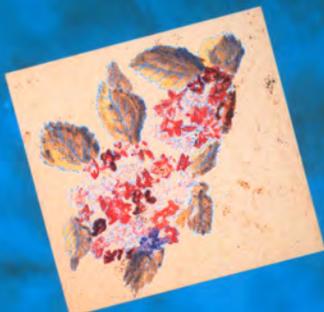
校区のあゆみ

# 福岡

豊橋校区史

33

## Fukuoka









# 校区のあゆみ

歴史と自然と文化の校区 福岡



昭和49年12月福岡小学校創立100周年記念「良友の碑」 題字は河合陸郎第22代豊橋市長



6日・10日の風物詩「六・十の市」は昭和39年より続いている



ヒドリガモも渡来して遊泳する柱第二公園（なます池）



校区史の重要な手がかりとなった「橋良村舊事蹟草稿」  
昔の小字名の由来・寺社・塚・古墳・清水を初め、言い  
伝え聞き書き等考証学的に集大成したもの（正光寺蔵）



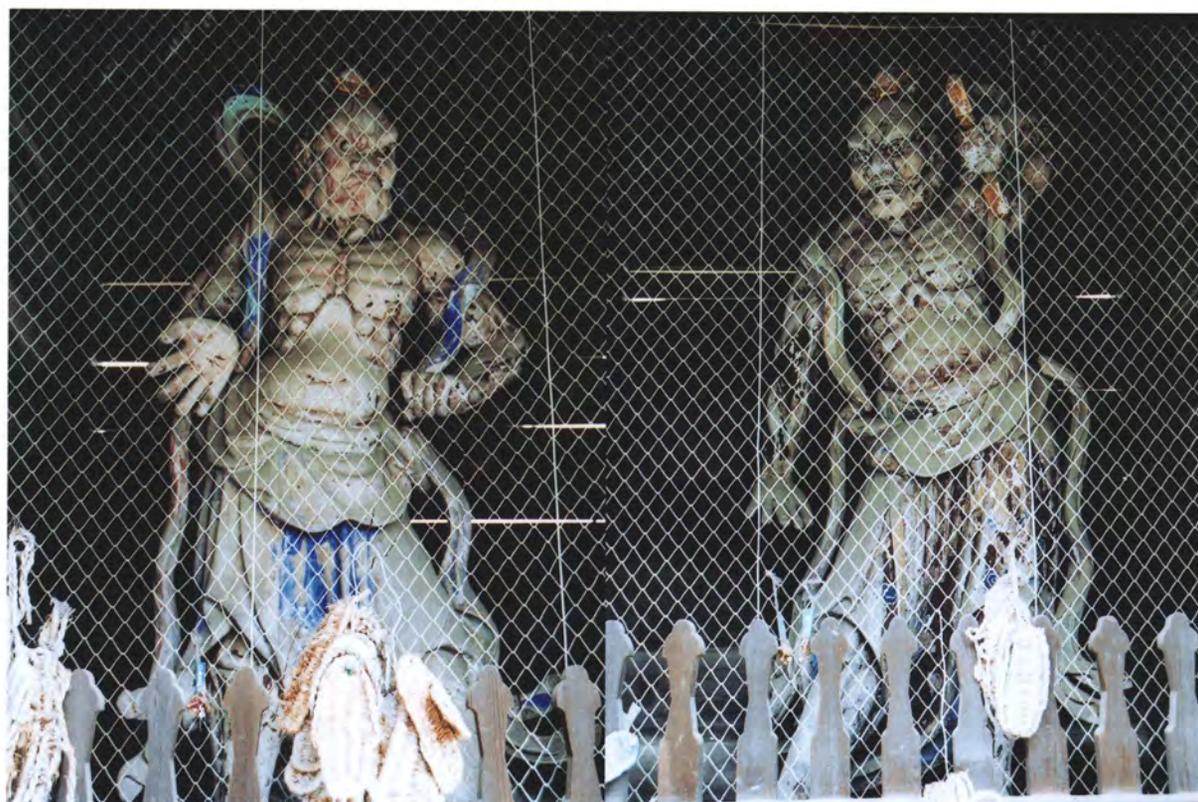
橋良神社鳥居横にあるシャシャンボの木  
「豊橋巨木名木100選」にも選出されている（橋良町）



豊橋鉄道渥美線の上下車両が入り替わる小池駅



左：小松原街道・右：田原街道の分岐点にある  
文化4（1807）年の常夜燈（柳生町）



潮音寺山門の仁王像「元禄12年9月吉日 京都寺町三条大仏師斉藤左近法橋浄慶作」とある



小池神社・橋良神社の例祭奉納として行われる勇壮な仕掛花火・手筒花火

# 発刊によせて



平成18年度  
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度  
福岡校区総代会長

足 立 勝 彦

わが校区では、昭和60年に中野小学校との分離を記念して、校区誌「福岡むかしと今」が刊行され、「郷土学習」に活用されてきました。

今回、これを母体とし、新しい事項を加え、とよはし100祭記念事業の一環としての「校区史」を、編集委員はじめ関係各位のご尽力により完成いたしました。ここに厚く御礼申し上げます。

福岡校区を特色付ける最たるものは、旧軍隊とのかかわりであります。豊橋が「軍都」と呼ばれた時代があったことから想像されますように、大きな影響を受けました。終戦後は、軍の跡地や建物を利用して、実に多くの学校・公共施設などが誕生いたしました。

自然に恵まれ、弥生時代の遺跡の多いこの地も、戦後の変化・発展には目覚ましいものがあります。市街化・宅地化が進み土地の様相は大きく変わりました。

「賢者は歴史に学ぶ」と言われますが多くの先人達が作り上げてきた郷土の歴史を、この機会に学び直し「郷土愛」を育てることができれば幸いです。

ひいては、このことが地域の連携を強め、学校教育や社会の発展に資することを期待して、ごあいさついたします。

第1章 福岡校区の自然	7
1 地質	7
2 大昔の海岸線	8
3 清水と池	9
4 柳生川	11
5 植物	13
第2章 福岡校区の歴史	15
1 柳生川沿いの湿地帯で始まった農耕	15
2 鎌倉から戦国時代	17
(1) 鎌倉時代の校区	17
(2) 十三本塚の悲劇	21
第3章 新しい世の中	25
1 「福岡」の移り変わり	25
2 軍隊と福岡	26
3 戦争中の暮らし	28
4 復興する町	30
5 校区の公共施設	31
第4章 教育と文化	32
1 寺子屋・正光寺のころ	32
2 元学校のころ	33
3 昭和の初めのころ	34
4 終戦直後のころ	36
5 鉄筋校舎に変わっていったころ	38
6 百年祭以降	40
第5章 氏神様とお寺	43
1 校区のお宮	43
2 校区のお寺	48
編集後記	52

## 表紙：インターロッキング

福岡小学校創立120周年を記念して東側の通学路に埋められている、福岡小学校児童の描いた絵「インターロッキング」。  
一輪車でバランスをとる児童や、小池神社大しめ縄の絵も見える。



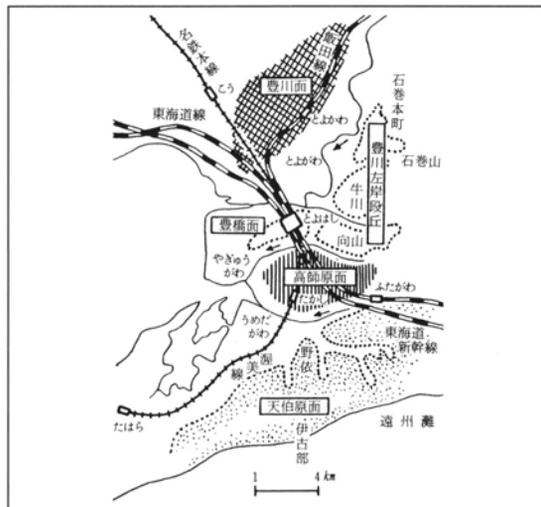
# 第1章 福岡校区の自然

## 1 地質

福岡校区は南に高く、北へ行くほど低い地形をしている。

このような地形は、豊橋平野全体の地形を形成したといわれる豊川が造ったもとと考えられる。

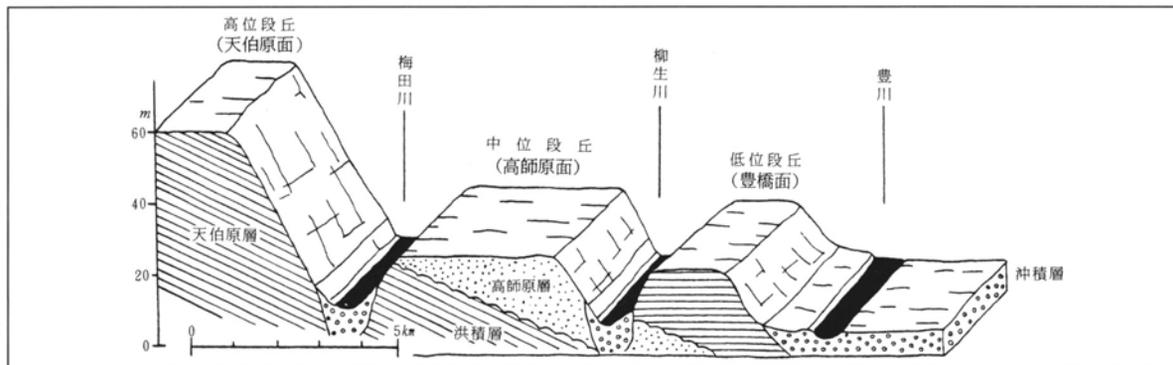
今からおよそ20万年前の豊川は、今の豊橋市街地付近を通りぬけ、太平洋に向かって流れていた。それは、豊川上流のレキ（小石）が、渥美半島の太平洋側で見られることから判断できる。やがて、渥美半島が盛り上がり天伯の台地が高くなった。その結果、豊川は、より低い三河湾へと流れるようになり、その豊川の河岸段丘として形成されたのが、高師原台地だ。高師原台地は、今からおよそ2万年から20万年ぐらい前の第四紀洪積世の時代にたい積した地層なので、第四紀洪積層と呼ばれている。大小さまざまな小石の混ざったレキ層、黄色味を帯びた砂の層、赤味を帯びたシルト層などがたい積されている。全国的に有名な高師小僧もこの地層に分布している。



豊川がつくった地形（池田芳雄氏「豊川市史」より）

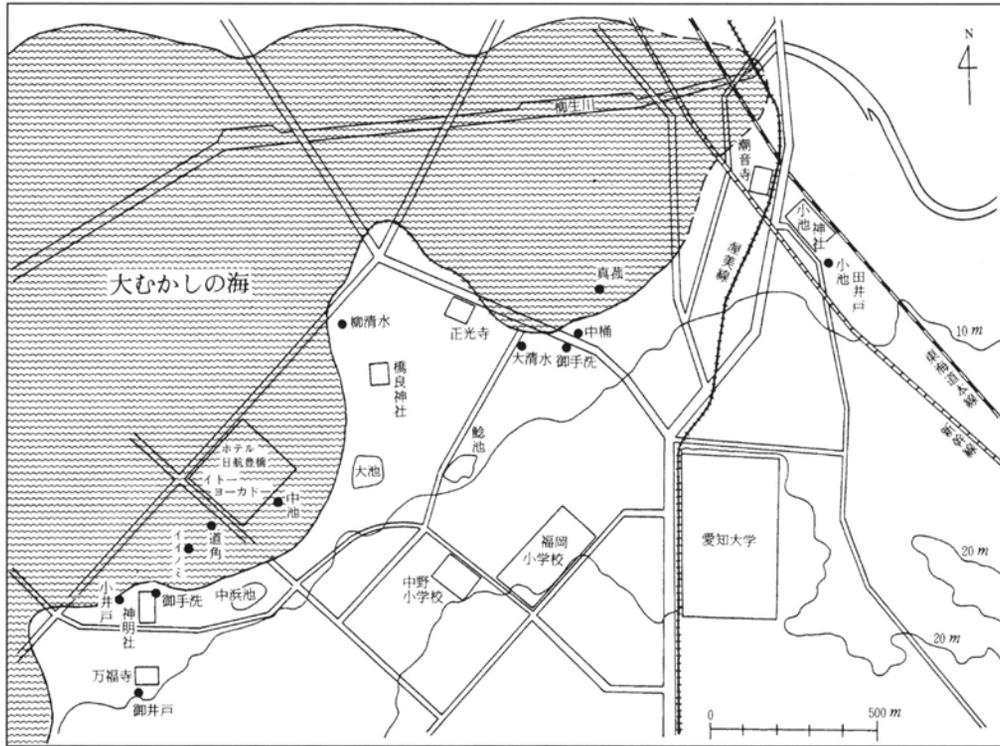
校区の南側の高い部分(海拔3~10m以上)は、この第四紀洪積層の上に存在する。

北側の低い部分は、約2万年前から現在までにたい積したり、海だったところを埋め立てた土地で沖積層と呼ばれている。柳生川が流れ、田畑が宅地化されているところだが、土地が低いため、大雨が降ると洪水を起こしやすい地域だ。また地盤がやわらかいので、地震にも気をつけることが必要だ。

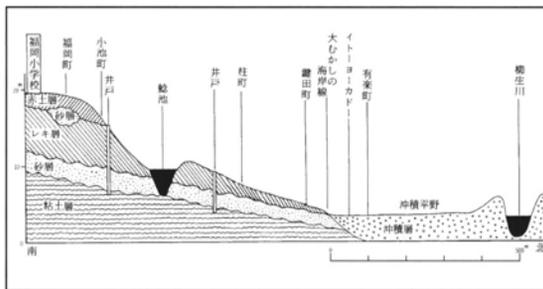


豊川下流の段丘分布と断面図（池田芳雄氏「豊川市史」改図）

## 2 大昔の海岸線



大昔の海岸線と清水の分布



福岡校区の南北模式図

沖積平野を1 m ぐらい掘ってみると、青灰色をした砂の層が出てくる。この砂の中には、ヨシの根や葉が入っていることがある。また、海拔3 m ぐらいのところには、小浜貝塚など大昔の人々の暮らしの跡があり、貝がらが出てくる。このことからこのあたりの沖積平野は、縄文時代には、海だったことが想像できる。小浜町から柱第一公園そして正光寺の北側から鴨田町へ、さらに塩満公園を通過して柳生川へ至る地形は、1 m 前後急に高くなって

いる。昔の海岸線だったのだろう。小浜や塩満という名前も、この海岸線から由来していると思われる。

この海は、古橋良湾と呼ばれる入江を形成し、ハマグリやバイガイ、アカニシなどの貝類や魚など海の幸がたくさんとれたことだろう。日当たりがよく、近くには清水もわき出ており、人々の豊かな暮らしぶりが想像される。



大昔の人々の暮らし

### 3 清水と池

#### ●清水

清水とは、地下水が地上にわき出てきたものをいう。この校区には、大小さまざまな清水があり、田井戸などに使われていた。

清水にまつわる話は、言い伝えや古い記録(橋良村舊事蹟草稿)によると、平安時代、京の都に住んでいた貴族が、急に東国の役人として任地へ下ることになった。この時、京の西の岡に住んでいた奥方は身ごもっていて、いっしょに行くことができず、夫が旅立った後、奥方は夫を恋い慕って付人の都築衛門夫婦を伴って旅に出た。

遠く離れた東国への旅路は女の足では無理なので、伊勢から船で渡ることにした。船が港を出ると間もなく暴風が起こり、吹きもどされて橋良の浜(柱の第一公園の南西辺り)に流れ着いてしまった。

奥方は身ごもっていたので疲れがひどく、とても衰弱した。そこで、衛門夫婦は、楓の木陰に奥方を休ませると飲み水を探しに行った。大きな柳の木の下にきれいな清水(柳蔭の泉という)を見つけてさっそく汲んでもどり、介抱した。船頭たちも、奥方がお気の毒だと言って船の古材を集めて来て仮小屋を建ててあげた。

奥方は、仮小屋でしばらく暮らしているうちに産み月となり、玉のような男の子を無事お産みになった。大きな楓の木の下で生まれたので、香延手丸かえでまると名前をつけて育てた。

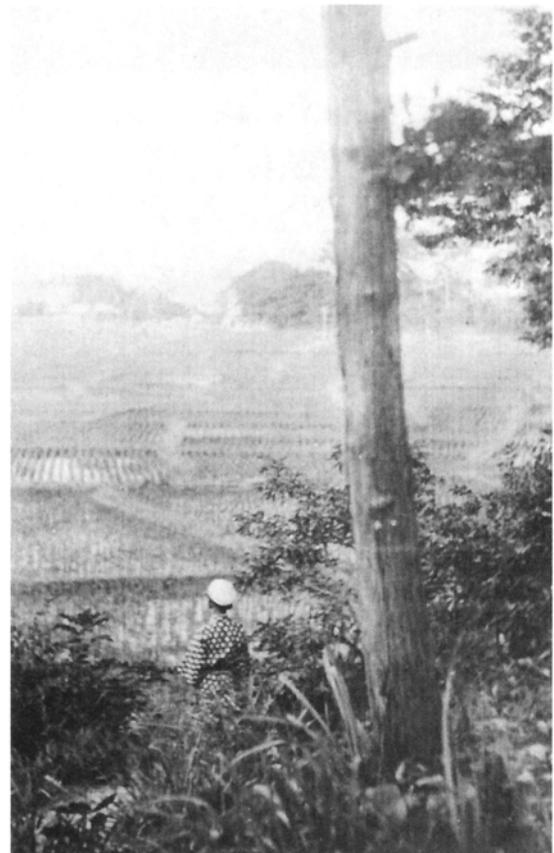
間もなく奥方に抱かれ、衛門夫婦に守られて父親の住む東国に旅立って行った。残された仮小屋は年とともに壊れ、腐っていきましたが、柱だけはいつまでも立っていた。そこでこの地を「はしら」と呼ぶようになったという。

昔は「波志良」とか「橋良」と書いたが、

昭和初期の区画整理後、「柱」と改められ、柱一番町から柱九番町に区分けされるようになった。

柱公民館の往時の橋良略図(橋良みどり会)によれば、柱方面には、柳清水(橋良神社の御手洗)、大清水、柱八幡様の御手洗、真菰まこも、中桶なかおけがあり、小池には小池神社南の田井戸があった。現在はどれも残っていない。

Aコープ付近には水田があり、あぜ道をふむとプカプカ水田がゆれたり、腰まで入って田植えをしていたそうだ。また、水田に必要な水は十分あり、清水には、フナ、ナマズ、ウナギその他たくさんの生物がいたようだ。この辺りは、今でも深田ふかだという地名がついている。小池という地名も、小池神社南の田井戸(小さな池)から由来して「小池」と呼ばれるようになったと言われている。



大正末期の深田(芳賀直美氏提供)

### ●井戸

水道が普及するまで、福岡の人々は井戸水を使って生活していた。いまでも残っている井戸がある。福岡小学校のあたりは、地下約14～24mにわたって粘土質の地層が存在している。これは地表では見ることはできないが、かなり上質の粘土層が、地下に約10mの厚さであると思ってよいだろう。

高師原台地に降った雨水は、砂まじりのシルト層やレキ層にしみ込んで、粘土質の上部にある砂層に貯留される。洪積層は、全体に北側に傾いているので、この地下水は、ほとんど福岡校区の北側へと流れてゆく。

海拔11mぐらいの小池方面では6～7m、海拔5mぐらいの柱方面では3～4m掘れば、水がわき出たことになる。

### ●池

現在、福岡校区には、大池、<sup>なます</sup>鯰池の2つがあるが、いずれも海拔5～6mにあり、水が干上がったことはほとんどないそうだ。清水や井戸と同じことがいえる。

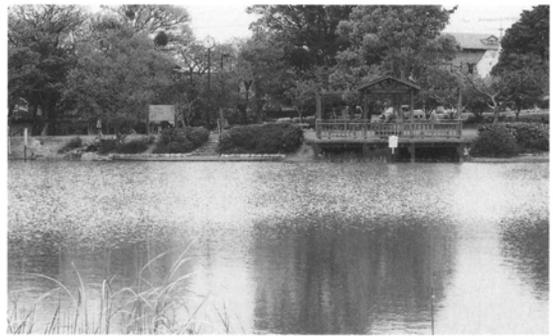
**大池** 柱保育園のある北側と西側にヨシやガマ等の水草がある。浅い池だが、中に入るとふんごんでしまい、水のないところで子どものひざぐらい、深いところでは胸ぐらいまで沈んでしまうので、池の中に入ると危険だ。また、ブラックバス等の放流や魚釣り禁止の看板が目につく。



大池

**鯰池** <sup>なます</sup>池ともいう。柱地区が水田だった頃、<sup>かんがい</sup>灌漑用の貯水池として利用されていたが、宅地化が進み、田畑の減少のため、使われなくなった。平成11年3月に柱第二公園(なます池)として整備され、掘られた井戸からの水を供給して水量を保ちながら、アシや水草による自然の浄化作用を促進している。

「鯰池の自然を守る会」や、南部中学校生徒の清掃ボランティア等の活動により、校区民のいこいの場として美しい姿を保っている。



鯰池(柱第二公園)



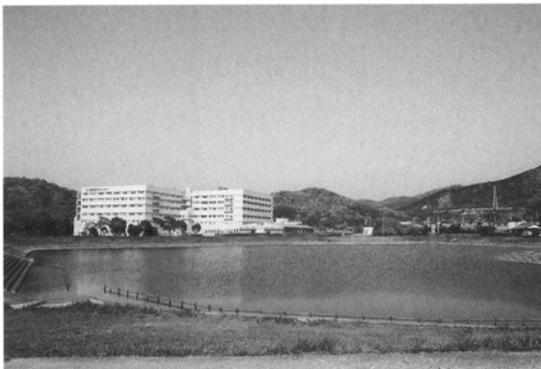
ホテル日航屋上より校区を望む

## 4 柳生川

**上流域** 柳生川の上流域はいくつかの支流に分かれている。それらを大きく分けると、1つは内山川から山中川・柳生川と下っていく水系、そしてもう1つは、殿田川から柳生川へ下る水系だ。

内山川から山中川へ下っていく水系は、静岡県との県境の山々からの沢水を集めたものが内山川となり流れ出している。内山川は途中で、宮前池・利兵池・影岩池・上庄池を通っており、利兵池と影岩池の間地点で地藏川と合流している。上庄池から流れ出した内山川は、岩鼻橋下流から砂防河川山中川となり、国道1号線と交差する山中橋から2級河川山中川と名前を変える。

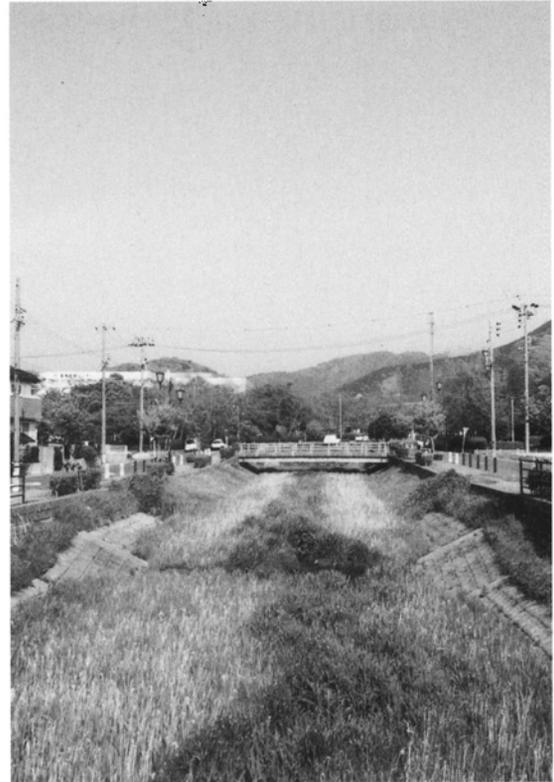
一方の殿田川は、静岡県境の山々の沢水が流入している唐沢池から流れ出ている。唐沢池から流れ出してから、途中で北殿田川、南殿田川、長三川など各支流と合流してゆく。



殿田川の水源地、唐沢池

このようにして福岡校区の方へ流れ込んでくる山中川と殿田川は、やがて合流して柳生川となる。

**中流域** 山中川と殿田川は、三ノ輪町・佐藤町・向山町の境で合流し、ここで私たちの校区福岡を流れる柳生川が誕生する。地元の人の中には、中流域の一部を石田川と呼ぶ人もいますが、正式には柳生川という。



殿田川上流のようす(飯村町どうこ橋より東方を見る)

合流地点での川幅は約20mぐらいで、平常時の水量はそれほど多くなく、川底が見える程度の深さしかない。川底では、小魚が水中を泳ぎ回っているのを見ることができ、とてもどかな感じがする。

合流地点からゆっくり蛇行しながら川を下っていくと、川幅は合流地点に比べ少しずつ狭くなり、土手や護岸が整備されている。



柳生川中流

柳生川をさらに下ると、東小池橋のすぐ下流に来るが、この左側に1本、川が合流して入ってきている。川といってもこの川には水がほとんどなく、近くに住む人に聞くと、「近ごろ、水はいつもありませんよ」ということだ。この川は山田川といって、昔はよくこの川がはん濫して、恐しい災害をもたらしたそう。今、水のかれた山田川を見ていると、時の移り変わりを感じる思いがする。

国道259号線と交差する境橋をすぎると、柳生橋・元柳生橋と交通量の多い橋がかかっている。この付近には、豊橋鉄道渥美線・東海道本線・東海道新幹線も通っており、柳生川上流ののどかな面影はすっかりなく、町中を流れる冷たい川のイメージしかわいてこない。また、元柳生橋を過ぎると川はもう運河に近くなるため、水深も深くなっていき、上流で見られた小魚が泳ぎ回る姿も見られなくなってしまふ。



渥美線の通る柳生川（境橋より）

**下流域** 小池橋の下流から、柳生川は柳生運河とも呼ばれている。正式には、豊橋市入船町から神野新田町地先を柳生航路といい、水深は基準面から1.5m、幅12~30m、延長4,150mとなっている。

柳生運河は、その効用を川として、また豊橋港の船の出入の航路として整備されてきた。昭和の初めごろは、豊橋港が現在のように整備されておらず柳生運河を利用した船も多かったようだ。この付近の地名の「入船町」もこのことに関係するのかもしれない。



豊橋港へ（神野新田町三郷の河口より）

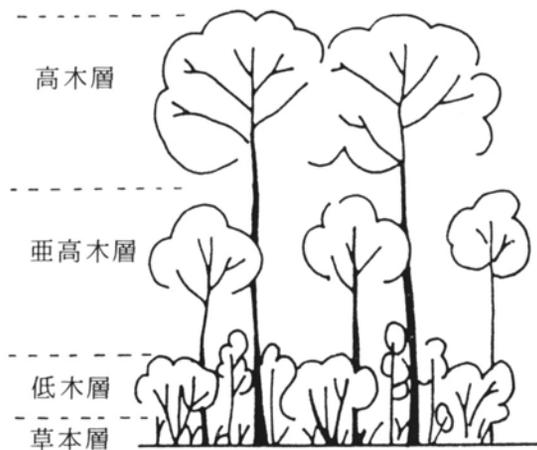
## 5 植物

### ●神社やお寺にある樹木

福岡校区にある神社やお寺・公園には緑がたくさんある。

林の中に入ってまず目につく大木の茂み、これを高木層といい、その下に枝をはる木の群れを亜高木層、私たちの背たけ前後の木々を低木層という。最後に草本層と地をはうつる植物がある。

**小池神社の樹木** 校区の中でいちばん大きな森を持つ神社だ。この神社を囲むようにして



森林の群落構造模式

クスノキの大木が茂っている。でも、このクスノキは自然に生長したものではなく、植樹したものだ。なぜかというと、昭和16年に起きた竜巻で、ほとんどの樹木が倒されてしまったからだ。

また高木のシイノキも多く、実を煎ってから食べると、香ばしい味がする。

鳥居をくぐると、サカキ、ヒサカキなどの木が目につく。これらの木は神事の時に使われる。また、亜高木のアラカシもあって、11月ごろになるとドングリをいっぱい落とす。



小池神社



クスノキ（クスノキ科）小池神社

**塩満公園の樹木** 塩満山潮音寺のとなりに、塩満公園がある。高木が多く、タブノキ、クロガネモチ、ヤブニッケイ、ムクノキ、クヌギ、エノキなどが茂っている。

冬の間じゅう枝いっぱい赤い実をつけたクロガネモチの姿は、とても美しい。また、公園のすみにあるエノキには、ヤドリギが寄生しているものもあり、冬になって落葉した後でも常緑なのでよく目立つ木だ。このヤドリギは小鳥が落としたふんによって繁殖すると言われている。エノキの実は熟すとかっ色になり、食べることができ、やや甘い味がする。

亜高木のイヌマキは、よく生垣などにみられる。



塩満公園



エノキ（ニレ科）塩満公園



クロガネモチ（モチの木科）塩満公園

橋良神社の樹木 シイの老木がそそり立つ神社だ。高木にはシイノキ、クロガネモチ、カクレミノ、亜高木には、ヤブツバキ、モチノキなどがある。また、低木には、ヤブツバキ、クスノキ、ムクノキなどが見られる。

鳥居の横の大きな木は、シャシャンボという木であるが、このあたりではチャセンノキとっている。低木のものが多いが、この神社にあるのは幹の太さが、子ども1人では抱え込めないほどもあり、「とよはしの巨木・名木100選」に選ばれている。

カクレミノという木は、若い木では葉が3～5つに裂けているが、成木になると切れ込みのない葉が多くなっていく。このことから、葉の形でその木が若木か老木かを見分けることもできる。



橋良神社



シャシャンボ（ツツジ科）橋良神社

## 第2章 福岡校区の歴史

### 1 柳生川沿いの湿地帯で始まった農耕

#### ●稲作の始まり

紀元前3世紀ごろ、大陸から渡来した弥生文化は、稲作の生産技術に金属や織機などの新技術を伴って、日本の各地へ野火のように広がっていった。

豊川の流域では、紀元前1世紀ごろから本格的に米づくりが始まったことが、豊橋市瓜郷町の瓜郷遺跡の調査から明らかにされている。

柳生川沿岸では、北岸の豊橋市東脇貝塚の調査で、瓜郷式土器（瓜郷遺跡で一番古い土器）が見つかったので、ほぼ同じころ、狩猟・採集の暮らしから農耕の暮らしへと変わっていったことがわかる。

#### ●遺跡の上にたつ町

現在の柱三番町の大部分の住宅と柱二番町および柱六番町のかかなりの数の住宅は、約10万m<sup>2</sup>にもおよぶ広大な弥生時代の遺跡の上に建っている。静岡県の登呂遺跡よりも大きな集落のあとが地下に眠っていると思われる。

右の図は、柱二番町・柱三番町および柱六番町付近の弥生時代の遺跡の分布を調べてまとめたものである。

弥生土器のかけらが見つかるたてあなじゅう竪穴住居址きょしの断面が観察されたところ（▲印）が32カ所以上わかっている。また、ハマグリを主とする小貝塚（●印）が12カ所以上見つかった。このことから、弥生時代になっても米づくりのかたわ

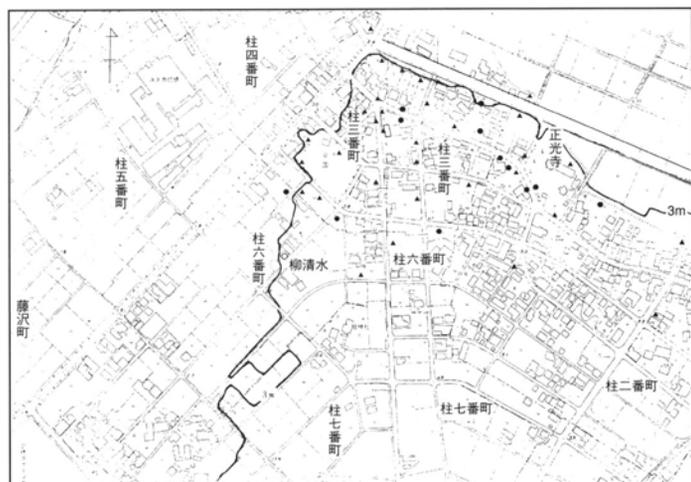


弥生式土器（中期・後葉、長床式土器）

- 佐藤直雄氏（故人）が、昭和12年11月、橋良町地内の道路工事中に採集。
- 当時、佐藤氏は豊橋市役所土木課に勤務。
- 市内の出土品の中でも均整のとれた美しい壺。
- 高さ21.6cm 小池町原下（佐藤かね氏蔵）

ら、浜辺での採集の仕事がかなりの比重をもっていたことが想像できる。

また、石の斧や石の矢じりおのが見つかることは、弥生時代になっても、なお石器が



柱二番町、柱三番町、柱六番町付近の弥生遺跡分布図

かなり使用されていたことを語っている。

福岡校区内では、今のところ、柳生川の沖積地に面してエプロンステージのように広がる、柱町の低い台地にしか弥生人たちの生活のあとは、わかっていないようだ。

弥生時代になると、縄文時代よりもやや海水面が下がり、入江の陸地化が始まったといわれている。この時代、小池方面では、柳生川の流路の関係からか、いまだ農耕に適する湿地帯がなく、下流部の小浜方面でも、なお海水が入り、水田づくりには適さなかったのに比べ、柱台地の周辺の湿地帯は稲作に向いていたといえるだろう。

(渥美郡史によると、小浜貝塚から弥生式土器が発見されたとあるが、現在は不明。)

### ●弥生時代の柱ムラを守る堀

柱町で、弥生時代の遺跡の多いのは、海拔3～4mの洪積台地の縁端だ。この高さには遺跡が多いのは、わき水との関係が深いようである。

柱の柳清水やなぎしみずは、地図でみると3mの等高線上に存在する。わき水に近く、しかも洪水の害のない安全な場所を求めるとすると、やはり、3mから4mのところには生活ラインをおいたのだろう。

このわき水は灌漑かんがい（田畑に水を引くこと）にも利用された。

初めは、せまかった田もムラ人の共同作業で少しずつ増やしていったと思われる。ムラ人は海水の潮止めと柳生川の洪水から耕地を守ることに苦労したことだろう。

農業が順調に発展すると、富が蓄わえられていき、力のあるムラ人は、より多くの富を持ち、その余力でさらに耕地を広げ、強大な力を持つようになった。

こうして、1つの村の中で、収穫物の一部が特定の人のところへ集められていくようになった。やがて、彼らは族長として、近くのムラを従え始め、いくつかのムラの統合が進むうちに、だんだん小さいクニにまとめられていった。

このようなとき、柱ムラの人々は、どのようにしていたのだろうか。現在の県道豊橋環状線の柱三番町交差点から南東へ50mほど行ったところに、V字型の堀のあとが残っている。赤土層と礫層を上幅3.4m、深さ2m以上に掘り下げたもので、ここでは弥生式土器片が見出されている。

弥生時代の終わりごろ、各地では、外敵を防しゅうごうぐためにムラのまわりに周濠とよばれる堀がつくられたのだ。



V字型の堀のあと 柱三番町県道豊橋環状線南

## 2 鎌倉から戦国時代

### (1) 鎌倉時代の校区

#### ●伊勢神宮の隆盛を支え、神と共に生きる

当時の橋良や小浜付近は、大崎、磯辺から牟呂へ続く海を前にして、高師原台地の丘陵を背に、わらぶきや板ぶきの家々が点在する平和な部落だった。

国家の体制は、幕府の強力な中央集権体制だったので、地方は守護・地頭を初め地方の役人にしっかりと抑さえられていた。人々は、年貢や労力・雑役を幕府のために提供しなければならぬのが一般的なありさまであった。

**橋良御厨** 鎌倉時代の「吾妻鏡」という書物は政治のことがらが日記風に記録されているが、その中に「橋良御厨」のことばが出てくる。

御厨というのは、もともと神にお供えを調進（ととのえて納める）する建物のことだったが、後に神宮の私領（神領）そのものを意味するようになったので、橋良は伊勢神宮の私領であり神領となっていた。そして、神宮が必要とする物資や労力をお供えとして提供していた。

**強大な勢力の伊勢神宮** 当時の伊勢神宮の力は非常に強く、幕府と対等に、あるいは幕府から独立してその勢力を振り、全国に御厨（神領）を数百カ所も所有し、必要な財源を確保していた。

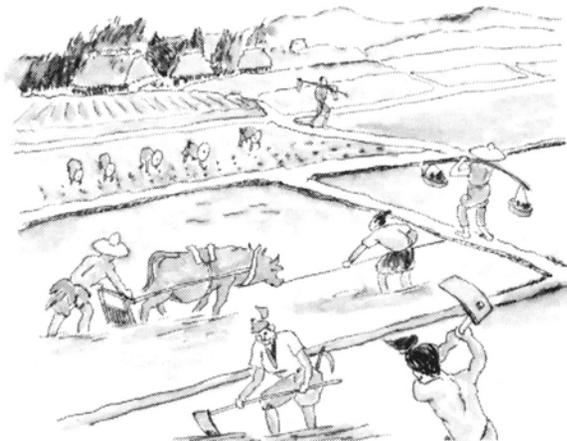
伊勢神宮が国家的な信仰を得て隆盛を維持するためには、財政の管理運営が全国的に大

規模に行われなければならなかったのだろう。伊勢に向かい合う三河の国 この辺は海をはさんで伊勢の対岸であり、神宮が支配するには好都合な位置に当たる。

昔は物の輸送は陸上よりも海上を船で運ぶ方がよかったのだ。現在の豊橋から渥美半島にかけて数多くの御厨があったのは、神宮に

近く海上交通に便利だったためだろう。

**神宮領となる 吾妻鏡の卷十六、建久10（1199）年5月の記録に、「16日丑の剋 大地震。今日、参河国薑御厨（今の仁連木町）ならびに橋良御厨の地頭職をもって、太神宮に去り進ぜしめたまふ。兵庫頭廣元これを奉行すと云々。」**（全訳吾妻鏡）



鎌倉時代の農村風景

鎌倉時代の校区の風景。田で働く人々を想像して描いたもの。

とあるが、これは幕府が伊勢神宮の要請を受けて橋良の土地から地頭を引き上げさせて、完全に神宮の神領として地頭の取り分を放棄し、全ての権限が神宮に寄進されたということだろう。

**橋良略図にみる古い地名** 昭和55年10月に、橋良みどり会の人たちが、橋良神社遷宮80周年を記念して、往時の橋良略図を作製した。それを見ると鯉池の北側に「橋良御厨」の地名がのっている。

また鯉池をはさんで「荒神場」の地名が2カ所ある。荒神は、かまどを守る神として民間で広く信仰されてきたが（荒神＝庚申と混同されることも多い）、橋良の場合は荒神＝皇神ではないかとも言われている。

さらに、「御支切」という地名が橋良村舊事蹟草稿（明治21年4月芳賀吉雄著）にあるが、これは、神域を仕切ることに関係がある

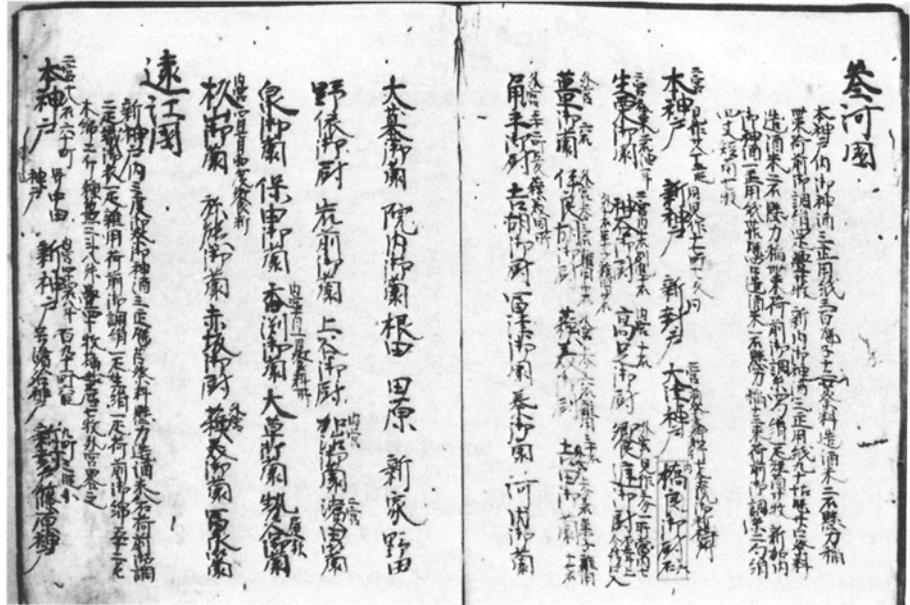
という考え方をしている人たちがいるということであろう。

神の民 いずれにしても、校区の先祖が神宮領（内宮の）として、神宮の民として、鎌倉時代前後から伊勢神宮と直接関係を持ちながら長い間生活してきたことがわかる。

当時の村の人々は、伊勢神宮を支えているという誇りをもって、神の民としての義務を果たすことに喜びをもっていたことだろう。

神の加護を受け、信心深く野良仕事に精を出していた姿を想像することができる。

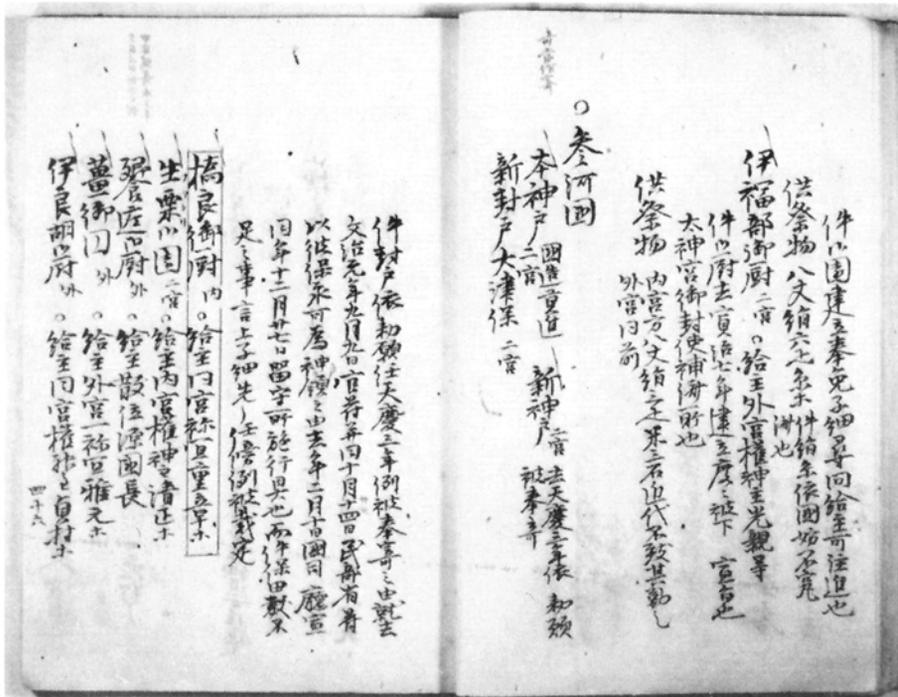
年に何回か船で伊勢まで行き来しながら文化の交流を深めていったともいえるだろう。



内橋良御厨 6 石の記述がある神鳳鈔（豊橋市美術博物館提供）

鎌倉時代の橋良村は、今の柱町から小浜町へ続く一帯の地域で、現小浜町神明社は内宮の神様をお祭りして建立されたものといわれている。そして、神領の繁栄を祈って祭事が行われてきたのである。

年6石の米を神宮へ納める 当時の神宮領についての記録（神鳳鈔）によれば、橋良村から年6石の米が内宮へ納められていたことがわかる。橋良御厨には、神宮直営の田があって、そこは一般の田よりも大きく、また一番実りの多いよく



皇太神宮建久已下古文書（豊橋市美術博物館提供）

肥えた田であったことだろう。

田植えや収穫の時期には、給主の指揮のもとで村の人々が出て仕事を行った。ふだんは、村の中から選ばれた人が見回りや監督をしながら作業が進められていたのだ。



### ●村のくらし

給主は<sup>ねぎしげあき</sup>祢宜重章等 神宮文庫所蔵の古文書の中に建久年間（1190～1198年）の神領関係の記録を集録したもの（皇太神宮建久已下古文書）があるが、その中に、橋良御厨の給主 内宮 祢宜重章等と記録されているので、神宮米の徴収、管理、上納等の諸事務をとり、神宮の支配を補佐したのは神職を務める重章他複数の人々であったということがわかる。

村の人々は、給主の取り分だけではなく、彼等の接待やもてなしまで負担しなければならなかったことだろう。

収穫した米は船で直接神宮まで送り届けるのが義務であった。毎年、村の若い衆が長老の指図のもとに米を積み込み、人々に見送られて伊勢まで行ったのだろう。そういう時は、身を清めて、かいがいしく働いた。

神宮から務めを終えて帰ってくると、神からの授かりものを村の各戸へ配って歩き、家々ではそれを<sup>うやうや</sup>恭しく奉納して1年の平安を祈って暮らした。

自給自足で、自由な暮らし 伊勢神宮へ出すための米作りだけが村の人々の仕事ではなかった。

そのころの暮らしは、江戸時代のように土地に縛られたものではなかった。畑に作る作物に制限を受けたり、生活全般を監視されるようなことはなく、比較的自由的な暮らしができた。他の土地へ移り住むことも自由だった。

橋良の村の人々は海から魚や貝をたくさん取り、海岸では塩もつくった。山に面した斜面では、登り窯で焼き物もつくっていた。ま



鎌倉時代の村びとの姿を想像して描いたもの

た、田での稲作に加え、畑では綿などの作物を作って糸や布を織り、菜種からは油もとっていた。高師原台地の西部は、木々が繁って深い森になっているところもあった。そこにはいろいろなけものが住みついていたから狩りもできたことだろう。

年に何回か神宮からの使者が橋良村へやって来るときは、海の幸、山の幸でごちそうを作り、お酒も用意してもてなした。

### ●福（神） 来たる岡に住む先祖

当時の世情 鎌倉時代には、<sup>ほうねん えいさい しん</sup>法然、<sup>らん どうげん にちれん いっぺん</sup>栄西、親鸞、道元、日蓮、一遍などの高僧が次々と新しい仏教を説き活躍したことは有名なことだが、当時の世情はどうだったのだろうか。

次も吾妻鏡にのっている記録から、「7月10日 晴る。晩に及びて、参河国の飛脚参じて、申して云はく、室平四郎重廣、<sup>そこばく ごう</sup>若干の強せつ盗人等を率し、当国の驛において、武威を振り、謀計を<sup>めく</sup>廻らすの間、<sup>ろし</sup>路次往反の庶民、これがために<sup>わづら つひ</sup>煩ひ費えあり。治罰を加へられずんば、<sup>せいひつ</sup>國中静謐しがたしと云々。」（全訳吾妻鏡）

幕府は法律などを定めて政治の体制を固めていこうとするが、平安時代末期の不安な

時代、平家物語の一節に「<sup>ぎおんしょう</sup>祇園精舎の鐘のこゑ、<sup>しよぎょうむじょう</sup>諸行無常のひびきあり。…」は、鎌倉時代になっても簡単になくなるものではなかった。

前記の文は、1199年の幕府の記録だが、当時のこの地方の世情を物語っている一例である。

強盗やどろぼうがはびこり、悪人が横行すればするほど、人々は生命や財産に対して不安を持っただろう。また、幕府の取り締まりに不安も抱いていたことだろう。

さらに、<sup>えきびょう</sup>疫病や自然の災害に対する不安などいろいろな心配が人々を苦しめた。



寺院参詣の人々

毎日の生活や心のよりどころとなるべき道徳や人生観も定まらず、<sup>こんとん</sup>混沌とした世情を呈していたともいえるのだ。だからこそ、新しい生き方、万人が平和になれる方法を求めて人々は真剣に考えようとしたのだ。

新しい仏教が説かれたのもそのような背景があったからであろう。

にぎわう寺々 主要な街道に沿って各地で寺院が建立され、多くの参詣人でにぎわったの



にぎわう寺々

もそうした不安な世情の象徴とも考えられる。

校区の潮音寺、正光寺はいずれも鎌倉時代に幕府と深いつながりをもって栄えた寺々だ。

治める人も、治められる人も仏や神に助けを乞い、自己の保身と平安を祈っていた。

そうした世の中であって校区の先祖は伊勢神宮へ<sup>つか</sup>仕えまつる人として、お仕え申す喜びを持ちながら日々生産に励んでいた。

高師原台地の西に福(神)来たる岡があり、神の恵みにあずかっているという信心を持ち続けて、今の私たちと同じ顔の先祖がつつまじやかに暮らしていたと思われる。

(2) 十三本塚の悲劇

●十三本塚物語

時代は戦国の世、16世紀、今川義元は駿河、遠江、三河の三国を従え、尾張の東から南部まで伸びる一大勢力を誇っていた。この東三河地方も今川氏の勢力下にあった。

今川義元は、京へ上るために、織田信長を倒さねばならない。軍勢では圧倒的に強い義元軍だったが、信長の奇襲攻撃にあい、あつけない最期を遂げた。

永禄3(1560)年、世にいう「桶狭間の戦い」である。

義元の死により、尾張・三河における織田、徳川、今川の勢力分布は変わり、織田、松平(徳川)勢力が強くなった。これより、今まで今川方についていた東三河の諸将達は織田・徳



人質13人処刑の図

川方に寝返りをうった。つまり、彼らは、義元の跡を継いだ今川氏真は「武将」としての力がないと考えたのだ。

当時のならわしとして、忠誠を表すあかしに、「武将」に人質を送ることがあった。もし、忠誠を誓った部下が反旗を翻した時には、その人質は殺される運命にあった。

今川氏真も、永禄4(1561)年東三河の部下の反旗に腹を立て、吉田城に預かっていた彼らの人質13人を、小原肥前守鎮実(ひるがえ)に命じ、吉田の龍拈寺山門前で串刺しにして殺した。

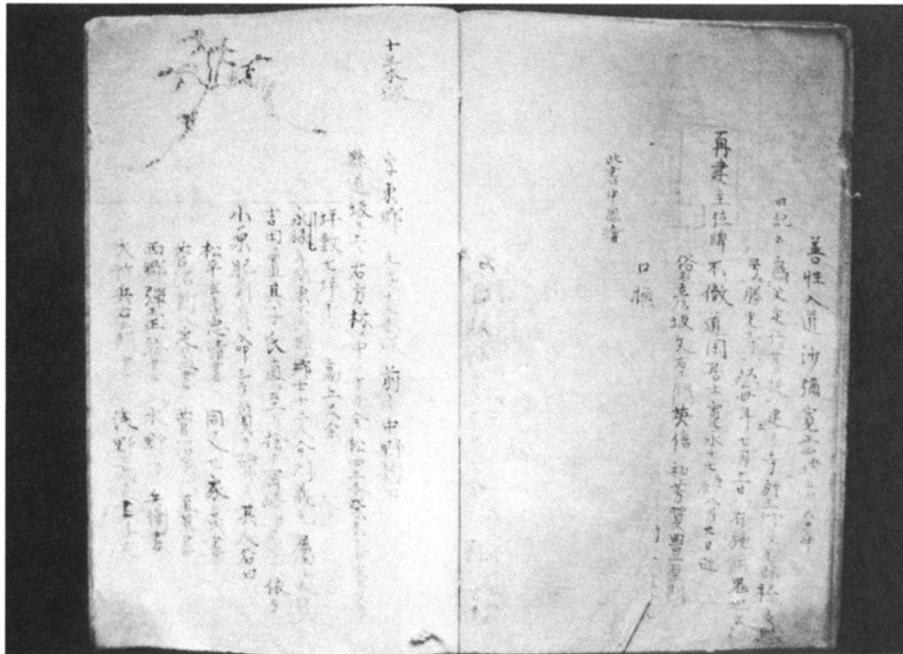
殺された人質は、ほとんどが諸将の妻や女、幼ない子どもばかりであった。十三本塚物語は戦乱の影に隠れた犠牲となった人々の悲しい話である。

この時に殺された人質については、「三河国二葉松」、「参河国名所図絵」、「橋良村舊事蹟草稿」などの文献にのっているが、丸山彭先生は多くの文献を比較対照され、左のように修正した表をつくられた。

また、この時に殺された人質の葬られた場所は中野新田とされているが、二説に分かれており、正しい場所についてはっきりしたことは分かっていない。

田峯	作手	設楽	長篠	野田	西郷	嵩山	下條	多米	古宿	竹谷	形原	三河国二葉松所載
			浅羽三大夫 子供	菅沼左衛門貞景 妻	菅沼新八定盛 妻	西郷弾正正勝 妻	奥山修理 妻	白井氏 妻	梁田某 妻	水野藤兵衛 妻	松平又七家広三男 左近	松平又七家広 妻
			菅沼小坊師	菅沼左衛門貞景 妻	菅沼新八定盛 妹	西郷弾正左衛門正勝 甥	奥山修理 妻	白井麦右衛門 妻	戸田孫右衛門氏輝 妻	水野藤兵衛 妻	松平玄蕃允清善 長女	松平又七家広 妻
			永禄四年四月、氏真と断つ。	永禄七年晩春、麦右衛門の名は、三河国二葉松及び八名郡誌による。	形原の前、井尾族にて処刑。吉田城下竜念寺にて処刑。							

三河国二葉松の記録と、寛政重修諸家譜による修正表(丸山彭先生の「戦国人質物語」による)



橋良村舊事蹟草稿

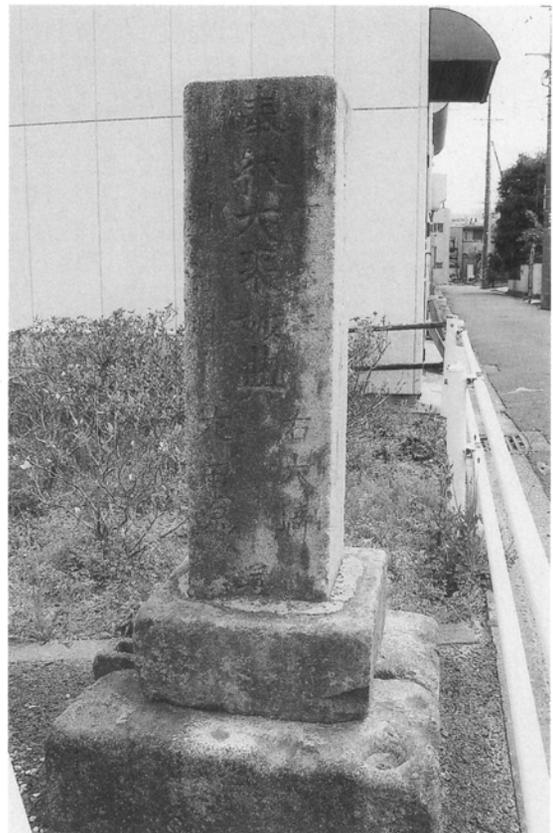
●大乗妙典の碑

初め県道豊橋環状線と国道259号線の交差点中央付近に建てられていたが、道路の拡張で、道の北の防火用水付近に移され、富本町排水路工事で溝に捨てられていたものを富本公園の東の隅に移し、さらに現在は高師口交差点の富本ビル北側に移動している。

長谷川正一さん（故人）の説。天保の頃、雲水らしい旅人がこの地に来た時、怪気に襲われ霊眼に十余の霊の姿が映り、里人に尋ねて十三本塚にまつわる話を知った。そこで、石柱を建て三日三晩大乗妙典を念誦読経し先亡諸精霊の供養をしたという。

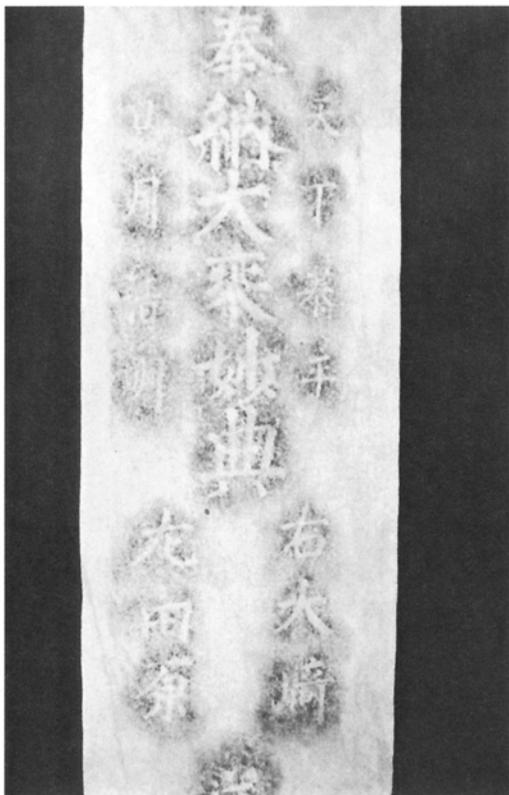
富本町という町名も十三本塚の十三本（トミモト）から名前をとったと言われている。

大乗妙典の碑に刻まれている文字については、丸山彭先生編集の「戦国人質物語・十三本塚の話」にのっているが、今回拓本をとってみると刻まれている文字について新たに発見できた部分もあった。しかし、長い年月の間に風化され、拓本に写し出されない文字もある。また、子どもたちが石碑に物をこすりつ

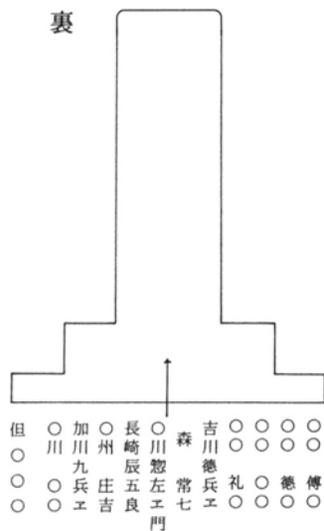
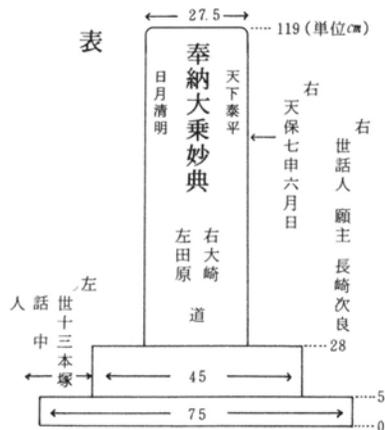


大乗妙典の碑

けて遊んだ穴が土台石にあけられている。



大乘妙典の碑の拓本



### 地藏尊

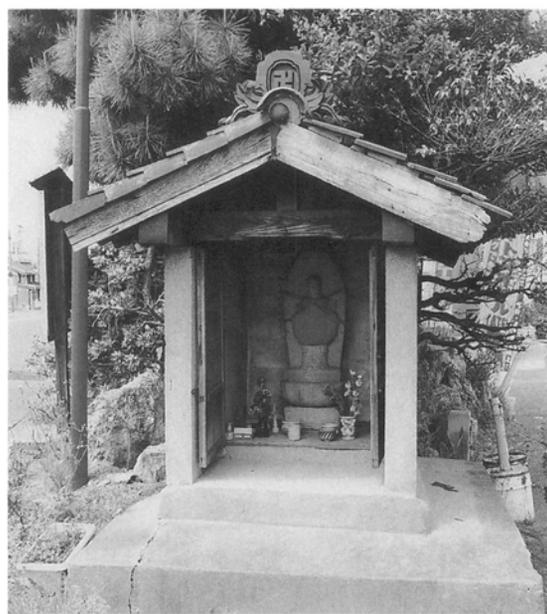
国道259号線、小池町上ノ山の坂の途中に小さな祠ほこらに祭られた地藏尊がある。

この地藏尊は、以前、今の福岡町の端山医院の北側にあり、大正後期に現在の位置に移転された。あたりは、龍拈寺の「三味場」で、昭和の初期まで松林の中にこぶのような盛り土が点在し、崖の断面にはところどころ人骨らしきものが見られたということだ。

そこで、人質の霊を慰める（人質に子供も含まれていた）ため、三味場の西側に地藏尊を建て供養をした。

毎年うら盆（陰暦の7月15日）ころに、福岡町内会の人々が、のぼりを立てお供物を上げ、供養をしている。その時、子どもたちにもお供物が配られる。

また、現在の位置は自動車の交通量が多いので、この地藏尊は交通安全の守り神のような存在にもなっている。



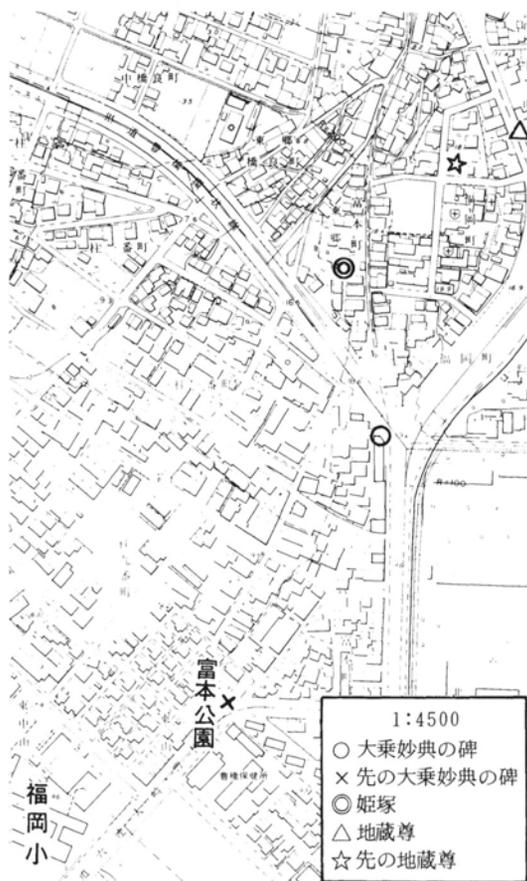
地藏尊

## 姫塚

この塚は、富本町に今もある塚で、十三本塚の事件で処刑された人質が葬られていると言われ、「戦国人質物語」、「橋良村舊事蹟草稿」、「郷土ニ関スル古記録綴」の「村誌図絵再追加調漏」などにも書かれているし、由緒ある塚である。十三本塚と言われていたが、処刑された人質に武将の妻が多かったため、姫塚と呼ばれるようになってきた。



姫塚



十三本塚に関する地図

「橋良村舊事蹟草稿」には、龍拈寺山門前で串刺しにされた人質の墓は「県道坂ヲ上り右方林ノ中ニアリ今松四五本柴木ナド生ヒタリ 坪数七坪半 高五尺余……………」とある。現在でも、径約5m、高さ1.8mほどの塚は昔の姿を伝えている。今もここに葬られている人質の霊を慰めるため、毎朝水や花、線香を供え供養を行っている。

十三本塚の物語は、戦国の世の移り変わりの中で失われた人間の生命の尊さを今に伝えている。

人質の葬られた場所の地藏尊説や姫塚説、大乘妙典の碑がある福岡校区は、十三本塚の悲劇の舞台であり、現在にまでとても深くかわりをもっている。

大乘妙典の碑を建てたり移転したりしたときの不思議な話とか、鎧をつけた武者の話など、いろいろな話が現在も残っている。

大乘妙典の碑が建てられた天保7（1836）年は天候不順で大変な飢饉の年であった。碑面に刻まれた「天下泰平、日月清明」の文字は戦乱の犠牲となった人々を悼むとともに、天災や人災に苦しむことのない、永久の平和の大切さを静かに私達に語りかけているように思う。

## 第3章 新しい世の中

### 1 「福岡」の移り変わり

現在の福岡は、豊橋市の一部として、発展を続けているが、以前は、渥美郡に所属していた。渥美郡から豊橋市に編入され、そして、現在使用している町名が誕生するまで、「福岡」がどのように移り変わってきたのかみてみよう。

#### ●福岡村から高師村へ

明治11(1878)年12月28日、「小松」「山田」「小池」「橋良」「小浜」「佐藤」の小さな6つの村々は、ひとつにまとめられ福岡村を作った。さらに、日清・日露戦争の後、明治39(1906)年8月31日、福岡村は、まわりの村々と合併して、渥美郡高師村大字福岡となった。

**豊橋市に合併への動き** 高師・福岡・磯辺・植田・大崎を含む高師村は、大きな面積だったが、大正12(1923)年4月に郡制が廃止されると、村は独立財政のために、財政面で苦しくなった。そのため、経済恐慌の余波が残る大正13年7月にはいと、渥美郡高師村は、豊橋市への合併を希望するようになった。同年7月24日に、村会は満場一致で合併を議決し、豊橋市の要望があればすぐにも合併するという態度を示した。

一方、当時の豊橋市は、渥美郡高師村に設置された第15師団のおかげで、消費都市、商業都市として発展してきた。ところが、大正14年4月師団が廃止されると、豊橋市は大きな打撃を受けた。そのため、豊橋市側からの合併は望めず、村会での合併決議は空念仏に

終り、いつしか立ち消えになってしまった。

昭和5年10月、軍都豊橋を工業都市化するため、丸茂市長が隣接町村合併案を発表すると、立ち消えになっていた合併機運は、再び高まりだした。高師村のなかでも、かつて兵営前町を作っていた福岡地区の住民たちは、合併を熱心に希望した。

しかし、豊橋市との合併は、高師村のうちで反対がなかったわけではない。6カ村の寄り合い世帯でつくられていた高師村は昔の村の独立性が強く、教育費などは、軽重の差が目立って大きく、村財政のアンバランスがあった。とくに、小池地区のように町並みもみられ、商店も多いところでは合併に賛成する人が多くいたが、他の地区では、税負担の過重を恐れて、合併に反対した。

#### ●町村合併

豊橋市周辺の村が豊橋市との合併を決議するなかで、高師村も、昭和7年7月、山口村長の説得により、ついに、合併に踏み切った。豊橋市は、他村との税負担の不均衡是正問題、梅田川改修問題、小学校授業料問題など、多くの難問を抱えながらも市会で高師村全村合併を可決した。同年、内務大臣より9月1日を期して合併を許可するという通知がもたらされた。こうして、渥美郡高師村は、豊橋市に編入されることになった。〔豊橋市政50年史〕参考)

## 2 軍隊と福岡

### ●師団の建設

日清・日露の戦いが終わり、もっと軍隊の力を強くする必要を感じた政府は、4個師団の増設を決定した。そのうちの一つが東海道筋に置かれるというので、沼津、浜松、豊橋、岐阜などの各都市は、自分たちの町に師団を設置しようと熱心な誘致運動を始めた。結局、明治40（1907）年3月21日、高師・天伯原を持つ豊橋に設置の決定が下された。

土地の買収などを終え、いよいよ師団の建設が始まった。建設のための資材は各地から運ばれた。当時は陸で運ばれるよりも船で運ばれることが多かったので、多くは牟呂の港に着き、牛車や荷馬車で運ばれた。やがて、牟呂から高師村まで3線のレールが敷かれ、トロッコで運ばれるようになった。といっても今のように電気の力で動くのではなく、人の力だけが頼りであった。このトロッコ押しの仕事は、高い賃金が支払われたため近郷近在の人たちはもちろん、遠くの方からも多くの人たちが働きに集まってきた。

トロッコの線路は、行きが2線、帰りが1線で、だいたい2人1組で押し、女の人も働いた。沿線には居酒屋もできたほどだ。

### ●校区に駐屯した軍隊

福岡と軍隊のかかわりは、明治41（1908）年11月15日に高師村に軍隊が設置されて以来、昭和20年太平洋戦争が終わるまでの37年間にわたって続く。その間に何千、何万の人々がこの地に集まり、そして去っていった。今まで農村地帯であった福岡も一転して軍隊の町に変わり、まさに軍隊と歴史を共にすることになった。

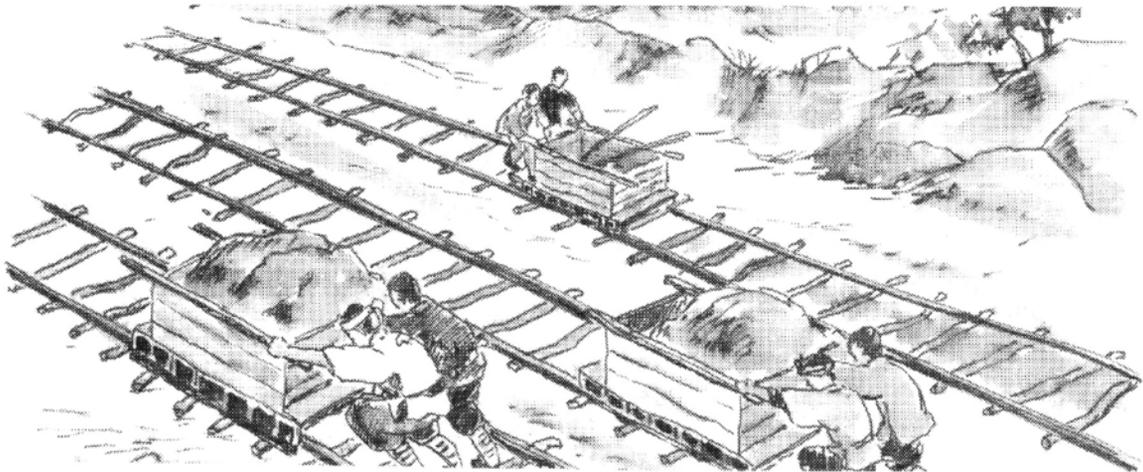
福岡小学校も、第15師団騎兵第19連隊の跡地につくられた。当時どんな施設が置かれたのかみてみよう。

#### 第15師団(明治41年11月16日創設)関係

- ・ 第15師団司令部
- ・ 歩兵第60連隊
- ・ 騎兵第19連隊
- ・ 野砲兵第21連隊やほうへい
- ・ 輜重兵第15大隊しちょうへい
- ・ 豊橋憲兵隊本部
- ・ 兵器支廠ししょう
- ・ 偕行社かいこう
- ・ 衛戍病院えいじゅう
- ・ 衛戍監獄

#### 騎兵第4旅団(明治42年4月1日創設)関係

- ・ 騎兵第25連隊
- ・ 騎兵第26連隊



トロッコ押しの図



田原街道を行進する騎兵（向坂嘉浩氏蔵）

●師団廃止

第一次世界大戦がすんでしばらくすると、世界的に不況の時代に入った。政府は軍備の縮少を迫られ大正14（1925）年3月27日ついに第15師団を含む4個の師団の廃止を発表した。なお、騎兵第4旅団（第25、第26連隊）は、対象から外され、昭和7年満州へ出征するまで福岡に駐屯した。

廃止される部隊は次のようだった。（校区関係分）

いよ  
豊橋師団廃止

師団廃止の新聞記事  
見出し（新潮報）  
大正14.3.28

- ・歩兵第60連隊
- ・野砲兵第21連隊
- ・騎兵第19連隊
- ・輜重兵第15大隊

師団が廃止されて一番影響を受けたのは、地域住民であった。5,000人近い兵隊がいつにいななくなったので、富本、小池あたりの商店は客が減って商売ができなくなりはじめた。特に軍隊専門のみやげ物屋、料理屋・旅館などはやっていけなくなり店をたたむところも少なくなかった。

また、今まで兵隊に家を貸していた人たちも貸す人がいなくなり、官宅や借家が空き家になった。

もうひとつ大きな問題は、農家に与える影響である。兵隊肥、馬糞という貴重な肥料が、農家にとって今までのようにもらえなくなれば大きな打撃であった。それほど師団と地域住民との関係は密接なものであったことが、師団がなくなってよく分ったのである。

師団が廃止された後は、学校や軍関係の施設として利用された。その後、この地区は太平洋戦争でもほとんど空襲をまぬがれ、戦後は学校施設、官公庁、工場、会社の設立が行われ、特に文教地区として発展し、現在に至っている。

各部隊その後の変遷				
→明治	→大正	→昭和初期	→終戦	→現在
第15師団司令部	第4旅団司令部			愛知大学本部
歩兵第60連隊	豊橋陸軍教導学校(歩兵科)	豊橋陸軍予備士官学校		愛知大学
騎兵第19連隊	福岡尋常高等小学校	福岡国民学校		福岡小学校
野砲兵第21連隊	高射砲第一連隊	豊橋陸軍教導学校	豊橋陸軍	時習館高校・豊橋保健所 (砲兵科) 予備士官学校
輜重兵第15大隊	兵器庫			豊橋聾学校・工業高校
豊橋憲兵隊				(豊橋南消防署) 南部交番・豊橋市南部窓口センター (市図書館南分室) 豊橋市休日夜間急病診療所
兵器支廠				(時習館農業科農場) 南部中学・栄小学校
借行社		陸軍予備士官学校生徒集会所		愛知大学本部
衛戍病院		陸軍病院		(国立病院)
衛戍監獄				住宅
騎兵第25連隊		陸軍倉庫	(豊橋工業)(豊橋盲学校) 中野小学校(泰東製網)	マックスバリュー
騎兵第26連隊		補充馬廠		(山口毛織) ヤマナカ・県営住宅

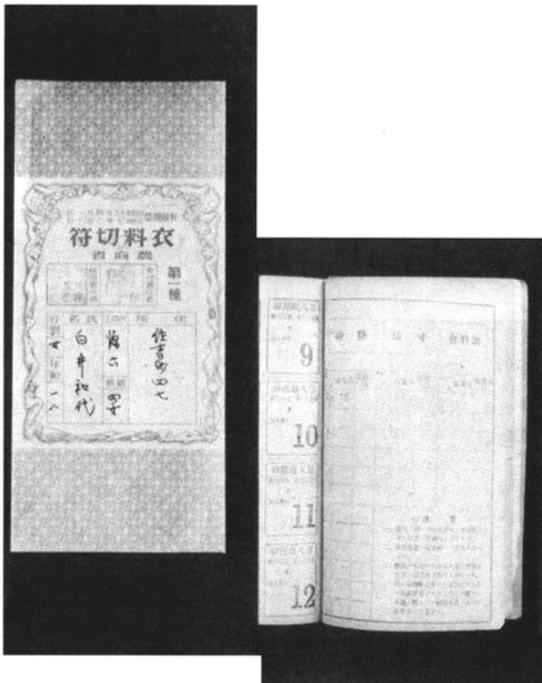
### 3 戦争中の暮らし

昭和16年12月8日、太平洋戦争が始まると国はさらに戦争に必要な兵器の生産に力を入れた。しかし戦争のため輸入が止まり物資が大変不足するようになってきた。国民は、「欲しがりません勝つまでは」の合言葉のもと節約と耐乏生活を強いられ、さらに昭和19年の終わりがら米軍による日本本土の爆撃によって国民の生活はますます苦しくなった。

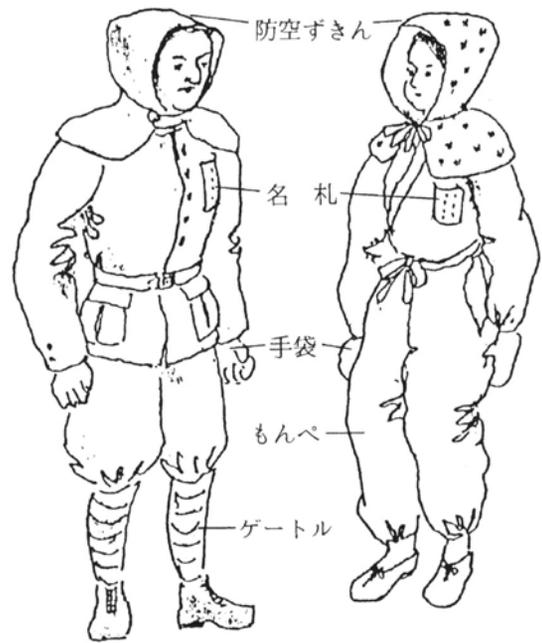
#### ●祖父母の生活体験

**着る物や日用品** 昭和17年2月、衣料が切符制になった。1年に100点が支給され、この点数内で購入が許された。たとえば背広1着50点、レインコート30点、長そでシャツ12点と決められていた。昭和19年になると石けん、ろうそく、ちり紙、タバコまで配給になり日常生活はかなり不便だった。

衣料切符 (白井俊明氏蔵)



家庭通帳 (金子千寿子氏蔵)



戦争中の国民の服装

**服装** 男の人は軍服によく似た国民服、足にはゲートルを巻いていた。女の人は着物をこわしたりして作った標準服にモンペをはいた。胸には必ず名札を縫い付け、住所・氏名・血液型等が書かれていた。また、外出する時は防空ずきんをいつも肩にかけていた。

**食料** 昭和15年7月に砂糖が配給切符制となった。昭和17年5月、米・酒・みそ・しょうゆ・パン・小麦粉・食用油・食塩・木炭などすべて常時配給品となった。

戦争が激しくなると配給量が減り、配給だけでは足りなくて空き地や荒れ地、学校の運動場まで耕して、サツマイモ・カボチャ・大豆・麦などを作った。

やがて米が満足に配給されなくなり、大豆や麦、サツマイモをご飯にまぜて食べた。日がたつにつれて、トウモロコシ・コウリヤン・豆かす・ふすま・サツマイモの粉などをふかしてご飯の代りにしたり、すいとんにして食べた。

住まい 米軍の爆撃機や戦闘機が飛んで来るようになると燈火管制が厳しくなった。電燈は黒い笠で覆い、窓には黒いカーテンを取付け一切外部へ光が漏れないようにした。ガラス戸に紙を貼って爆風で割れても飛び散らないようにもした。また空襲の時、待避する防空壕をどの家庭も掘った。

福岡小学校も運動場の西の松林と今のプール付近に児童用の防空壕を高等科の生徒が中心となって50～60掘った。空襲警報が発令されると急いで防空ずきんをかぶり、帯芯で作った雑のうに乾パンなどの食料や薬品、通帳などを入れ防空壕に避難し、敵機の去るのを待った。



防空壕の跡

しゅっせい  
出征兵士の妻 18年10月、夫に召集令状がきた。夫は家族、町内の方々といっしょに小池神社で武運長久の祈願を受けた。万歳と出征兵士を送る歌で豊橋駅まで見送られ、三島の野戦重砲隊に入隊した。一針一針に夫の無事を祈りながら千人針の赤い糸を結んで持たせ

た。働き手が兵隊にとられ、つらい苦しい毎日だった。

防空訓練 国は航空機の発達に伴う近代戦に空襲は必至であると考え、警防団と町内には隣組を組織化し、お互いに力を合わせて自分たちで隣組の中へ落ちた焼い弾を消させようとした。「時局防空必携」、「家庭防空の手引」を配ったり、「国民防空図譜」(掛図)などを使って空襲に対する心構えや防ぎ方を指導した。また防火用水、火たたき、むしろ、バケツ等を用意させ、警防団は婦女子に火たたきや砂袋の使い方やバケツリレーによる消火訓練を行った。



富本町の防空演習(松山満夫氏蔵)

大戦中の戦死者 遺族会の資料によれば、校区の戦死者は108名、なかには兄弟3人が戦死というケースも幾組もある。また、豊川海軍工廠に動員され、爆撃にあい10名の学徒が亡くなっている。

## 4 復興する町

### ●終戦

昭和20年8月15日に太平洋戦争は終わりを告げた。福岡校区においてもこの戦争で家族をなくし家を失うなど大きな被害を受けたが、人々は生活の立て直しに向けて懸命に努力し始めた。

**物資不足の中での家の再建** 6月19日夜の空襲で家を失った人たちは、親戚の家に間借りをしたり、近所の親しい家の別家を借りて住んだり、鶏舎を改装した急ごしらえの家に住んでいたりした。こうした人々はまず家の再建に取り組んだ。

全ての物が乏しかったので、一つ一つの材料を手に入れることがまず課題であった。材木は古材、新材を問わず寄せ集めたり、山に木を直接買いに行く人もいた。戦災で焼けた瓦やトタンも使った。釘を闇市に買いに行ったり、家の基礎に昔の土台石を使ったりした。

大工さんを探してくるのも、<sup>しやりき</sup>車力さんに頼むのもすべて自分でやり、家が建てられた。また2間×3間ほどのバラック小屋を3,000円の費用で市に建ててもらう人もいた。焼失した家の多くは数年のうちに再建されていった。

**食糧難** 終戦直後は食糧難の時代でもあった。外地から引き揚げてくる人や復員した兵隊で人口が増える一方、戦争のために食糧の生産量が減少していたからである。サツマイモのつるを食べたとか、百姓をやっても食べるものが足りなかった、といわれるほどだった。

**食管理法で縛られる農業** 農業では農地改革が行われ、福岡校区でも多くの自作農が生まれた。このころ、田では米、畑ではサツマイモや麦、ジャガイモが多くつくられた。主食の代わりになるものの栽培が推奨されていたからだ。

終戦後間もないころに使われていた紙幣



戦後発行された紙幣（藤城新市氏蔵）

（上）22年発行の10銭紙幣

（下）23年発行の50銭紙幣



証紙をはった旧紙幣（白井俊明氏蔵）

新券が間にあわなかったために、旧紙幣に証紙をはって臨時に通用させた。

## 5 校区の公共施設

福岡小学校は、師団が廃止されてから、昭和6年に現在の場所に移転した。終戦後には愛知大学、県立時習館高校、県立豊橋工業高校、盲学校、聾学校、南部中学校などの学校が兵舎を利用して設置された。軍の面影を残すものは、ほとんどなくなってきているが、愛知大学には歩兵第60連隊や第15師団司令部の営門などが現存している。福岡小学校にも昭和7年竹田宮恒久王殿下がお植えになった、「お手植えの松」が残っている。



竹田宮恒久王殿下の「お手植えの松」

### ●校区民の利用する主な公共施設

**南部交番** 南部交番は憲兵隊の建物をそのまま使って置かれた。

昭和56年2月に現在の建物になった。

南部交番



**豊橋保健所** 昭和46年10月、現在地へ移転。保健・健康・公害に関する業務をしたり、各種の健康診断や相談、またそれについての指導を行っている。



豊橋保健所

**豊橋市南部窓口センター** 昭和57年5月31日、市内9カ所同時に開設された「窓口センター」のひとつ。戸籍や、住民異動などの届けや、各種の証明書の発行などの窓口業務を取り扱うことで、市役所から遠い地域の人が大変便利になった。



豊橋市南部窓口センター

**豊橋市休日夜間急病診療所** 昭和60年4月から現在まで休日および夜間の内科・小児科急病者を診療している。



豊橋市休日夜間急病診療所

## 第4章 教育と文化

### 1 寺子屋・正光寺のころ

#### ●寺子屋

明治5（1872）年の学制頒布以前の教育機関は藩校（武士の子弟教育のために諸藩が領内に設けた）と寺子屋（庶民の子弟のために読み書きそろばんを学ばせた）があり、寺子屋は幕末から維新にかけて広く普及し、豊橋地方には約250余りあったといわれている。



筆子の建てた師匠  
（近藤亀蔵）の墓碑  
正面一忍翁持戒庵主  
一忍室義戒大姉（妻）  
右側面一筆子中 世話人  
三浦太郎作  
鈴木種十  
鈴木豊吉  
明治14辛巳旧4月建之  
（萬福寺）

福岡校区（旧福岡村）の寺子屋一覧表

名称	師匠氏名	身分	科目	創設	廃止	常時生徒		常時教師	所在地
						男	女		
	近藤亀蔵	農	書読	天保2年	明治7年	12	0	1	小浜村
萬福寺	岡部朴道	僧侶	書読	嘉永年中	明治6年	25	0	1	小浜村
正光寺	芳賀快眼	僧侶	書読	天保年中	明治6年	25	0	1	橋良村
潮音寺	小笠原東嶺	僧侶	書読	不明	明治5年	25	0	1	小池村
	岡田兵吉	農	書読	安政年中	明治6年	10	0	1	佐藤村

豊橋市史より（第2巻より）

#### ●橋良学校の創立

学制頒布以後、明治6年10月末までに豊橋地方にも小学校16校が開校され、次第に増加していった。

明治7年3月22日、橋良村正光寺に第10中学区第10番小学高足学校（今の高師小学校）出張所橋良学校が開校された。創立の際は芳賀快眼師、岡部朴道師、小笠原東嶺師等が教員となった。当時、本堂の広さは約30坪（90m<sup>2</sup>）であり、教室では3人掛けの長机、長腰掛を用いていたといわれている。



正光寺本堂と学校印

## 2 元学校のころ

### ●福岡学校の誕生

明治11(1878)年1月本校高足学校から独立し、第10中学区第28・30番小学福岡学校と改称された。校舎は従来の正光寺であった。

### ●校舎新築

明治11年4月、橋良村東郷に校舎を新築した。以来昭和6年3月現在地に移転するまで、約53年間、この東郷の地に学校が存在していた。



橋良学校運動場にて  
一当時の子どもたちは着物で登校し、  
5年生になると袴をはいた。

### ●<sup>すうち</sup>崧池学校

明治15年9月29日、福岡学校から分かれて小池村字原下に<sup>すうち</sup>崧池学校が設立された。

崧池の崧とは「山が高くそびえる」という意味だが、同校の通学区が山田、小松、小池だったため山田の山、小松の松、小池の池をとり、字を組み合わせ崧池となったとも言われている。同校は明治18年9月、廃止され福岡学校に合併された。さらに<sup>みのわ</sup>三輪学校に通っていた佐藤村が福岡校区に加わり学区が拡大されたが、富田新田は牟呂校区に編入された。

### ●小学校令公布

明治19年に公布され、<sup>じんじょう</sup>尋常、高等(各4年)に分け、尋常4年間を義務制とし、教科書を検定制に改めた。「小学校令」や「県の規制」を受けて、明治20年4月に、本校は磯辺学校と合併し、渥美郡尋常高等小学福岡学校と改称した。福岡学校は本校と称し、磯辺学校をその分教場とした。本校には、補習科(2年)を置いたが、進学率は2%ほどであった。

### ●教育勅語・御真影

教育勅語の謄本は明治24年3月に本校にも下賜され、その後の祝日大祭の儀式(元日、紀元節、天長節等の祝日)には奉読され、それに関する訓示が行われるようになった。

また、天皇・皇后両陛下の御真影は明治27年1月8日に郡役所へ出頭して拝戴。拝戴後もこの御真影の扱いについては、各学校とも大変気を使った。



御真影拝戴をのせた学校沿革誌(明27.1.8)

### ●高等科設置

明治25年7月に高等科3ヵ年を併置し、福岡尋常高等小学校と改称した。豊橋において高等小学校は下条学校と2校であった。

### 3 昭和の初めのころ

#### ●学校移転（現在の地へ）

東郷にあった学校は、次々と増築されていったが手狭であった。また、大正14（1925）年の第15師団の廃止により、軍の諸施設の中には使われなくなったものもあった。そこで、校舎移転の計画が進められ、昭和5年2月6日に騎兵第19連隊跡に移転工事が始められた。翌年3月15日に工事が終了し、当日は、校区民あげて盛大な移転新築落成式、祝賀運動会が行われた。



移転新築した当時の校舎



現在の校舎（昭60.1）

昭和7年には講堂（雨天体操場）も新築された。総工費23,000円、付属建物備品4,000円の当時としてはモダンな建物であった。

#### ●ごはん給食

昭和7年12月19日から、生活困窮家庭の児童を対象に、御飯とみそ汁の給食が始められた。当時、空の弁当箱を持ってきたり、家に昼飯を食べに行くと言って、実際には食べに行かない欠食児童がみられた。

給食は赤レンガ（旧軍隊の炊事場）で小使いさん夫婦、裁縫の先生、あいている女の先生方で作り、その隣の部屋で食べていた。正式の炊事婦はおらず、10人ほどで始めたが年々希望者が増え40人ほどになった。生活困窮家庭の児童は無料で、希望者は有料だったが、差別しないようにいろいろと配慮された。

このような企画は当時全国でも珍しいことであった。戦争が激しくなり、物資が不足するころまで続けられ、昭和9年には「栄養改善優良校」として表彰も受けた。

#### ●戦時体制下の教育

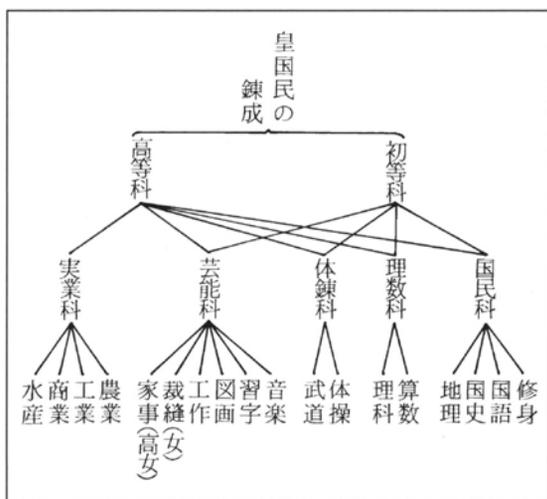
戦争は満州事変から日中戦争へと発展していき激しさを増していった。学校でも出征兵士の見送り、慰問文の作成、武運長久祈願、陸軍病院への慰問などが行われるようになり、次第に戦時色が濃くなっていった。



戦時中の児童書 一昭和14年 文部省認定一

●国民学校の発足

昭和16年、「国民学校令」が施行され、豊橋市福岡国民学校と改称し、尋常科は初等科となり、初等科の授業料は廃止された。自由主義・個人主義という言葉は嫌われ、団体訓練や錬成という言葉が好まれ、団体行進や駆け足訓練が強いられるようになった。



国民学校の教科一覧

●第5期国定教科書

国民学校教育を推し進めるために教科書も改訂され、内容は戦時色が濃く現れ、戦争完遂を目指す精神が盛り込まれていた。



昭和16年の国定教科書（伊東 音氏蔵）

●決戦体制下の学校

昭和16年

- 11月28日、竜巻が校区を襲い、本校児童2名が死亡し、多くの被害を受けた。
- 12月8日、太平洋戦争が始まった。

昭和18年

- 職員、児童により、一週間の突貫工事で校庭の周囲に待避壕が掘りめぐらされ、防空訓練の数が増した。
- 修学旅行が中止された。

昭和19年

- 高等科児童は、豊橋分廠、豊橋精機、郡是工場などへ工場動員に、初等科でも高学年は農場へ桑の木の皮むきや、落穂拾い等の作業に出かけるようになった。
- 校庭は掘り起こされて、芋やカボチャ、ナス畑に変わった。
- 遠足、学芸会等の行事は中止された。

昭和20年

- 警戒警報や空襲警報が毎日というほど発令され、その都度授業を打ち切って急いで下校したり、勤労働員、農耕作業に出て、授業は満足にできなくなった。
- 6月19日夜、豊橋が大空襲を受け、校区でも戦災学童約700名、死亡児童10名の被害を受け、校舎も一部焼けたが、消火作業により大事に至らなかった。

## 4 終戦直後のころ

### ●新しい学校づくり

新教育 昭和20年8月15日、ポツダム宣言受諾により、戦争は終わりを告げた。

同年10月～12月にかけてG H Qからの指令で、教科書の修正、削除が行われた。軍国主義教員の教職追放、御真影奉還、奉安殿撤去。修身、日本歴史及び地理の授業は停止され、教科書は回収された。そして、G H Qはその指令が確実に実施されているかを調べて回り、実施されていない場合は責任者は強く罰せられた。本校にも、昭和22年7月、パーカー大尉が視察に来た。

6・3制の実施 昭和22年3月、教育基本法、学校教育法が公布され、4月には新学制による小学校及び中学校が発足し、9年の義務教育となった。新学制実施に伴い、豊橋市立福岡小学校と改称され、男女共学となった。



戦後の教科書(昭22)(伊東 音氏蔵)  
紙の質が悪く、ページ数も少ない。

学校給食再開 昭和22年からララ（アジア救済連盟）物資放出によって給食が再開された。ミルク給食は、用務員さんが沸かしてくれたが、たくさんのミルクを一度に沸かすのは大変な作業であった。食器は自分自分で持ってきたものを使い、児童の体位向上のために缶詰やチョコレートがつくこともあった。また、時々、家から野菜等を持ってきて、みそ汁を作ってもらい、お弁当の副食として食べたりもした。

校歌誕生 昭和23年秋、本校在職中であった山田直美先生が作詩作曲をされ、本校にも校歌が誕生した。広々とした校庭とそれを取り囲む豊かな樹々の四季の美しさに平和の喜びを込めて作られた。

PTA誕生 昭和23年7月、アメリカの制度にならい、PTAが結成された。

結成当初の大きな仕事は、学校の施設設備充実のための資金獲得で、事業部がこの部門を担



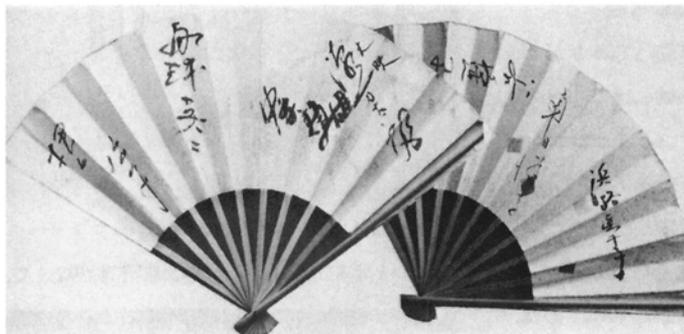
時の福岡小学校校歌の楽譜と山田直美先生

当していた。27年に“東海ひばり（後の大津美子）歌謡ショー”が講堂で開催され、大盛況に終わり、予想以上の収益を上げた。そして、翌年7月、公立学校としては前代未聞の一大興行を全市対象に市公会堂で行った。当時売り出しの大映スター若尾文子、南田洋子、船越英二等を招いた。ところが、興行裏面の無知から思わぬハプニングが起り、幾ばくかの挨拶金を払ったりしたので、収益はほとんどなしの状態であった。それ以後、地道にバザー等で資金作りを行っている。

### ●充実する学校

**急増する児童** 戦後の県・市の住宅政策により、児童数の急激な増加に見舞われ、教室不足になり、工業高校の教室を借用することになった。分校の当番職員が毎朝、連絡のために本校に出向いたり、リヤカーで給食を運んだりした。24年度は5教室、25年度は8教室、26年度も8教室を借用した。

**栄小学校の分離** 急増してしまった学校を適



スターサイン入り扇（白井俊明氏 蔵）

正規模にするため、昭和27年3月、栄小学校を分離独立した。1,052名の児童（19学級）、22名の職員で新しく栄小学校はスタートした。**東海レクリエーション大会** 昭和30年5月、第4回東海レクリエーション大会が、三笠宮殿下を迎えて豊橋（本校と八町小学校）で開かれた。殿下は、本校にも御来校になり、研修会と活躍の様子を御視察された。

### 施設作り始まる

昭和30年—バックネット

昭和31年—新給食調理室

昭和32年—待望のプール

昭和36年から校舎の増築鉄筋化が始まり、施設は充実していった。



プール開き（昭32.7.21）

## 5 鉄筋校舎に変わっていったころ

### ●日水連より表彰

昭和32年、待望のプールができ、全校あげて水泳に取り組んだので、水泳人口の底辺拡大、各種競技会の好記録が認められ、昭和40年12月、日本水泳連盟より表彰された。



児童水泳優秀校として日本水泳連盟より表彰

### ●特殊（あすなろ）学級がスタート

昭和41年、1学級7名で特殊学級が開設された。最初の先生は磯辺はるゑ先生であった。翌年には2学級15名となったが、現在は2学級6名である。最初のころは教室が不足していたので、竹栄寮が教室だった。そのころは、みんなの理解も得られず、だいぶ苦労されたようだ。



あすなろ学級の教室風景（59年12月）

### ●全教室にテレビ設置

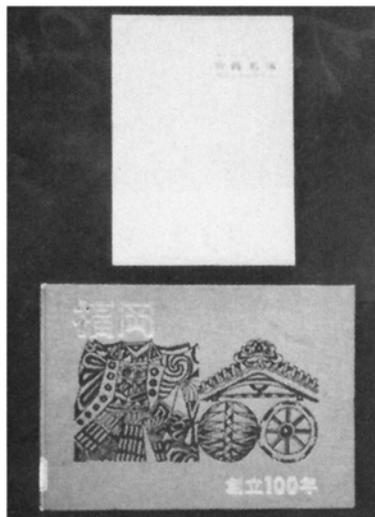
昭和41年、テレビ設置のためテレビ設置委員会がつけられた。校区の人々の理解のもとに290万余円ほどが集まった。そして親テレビ2台、子テレビ30台、VTR1台、テレビカメラ、テレビ台、カーテン等が整った。全教室にテレビが設置されたのは、市内でも一番早かったようだ。子どもも先生も大喜びだった。



放送室

### ●福岡小学校百周年記念式典

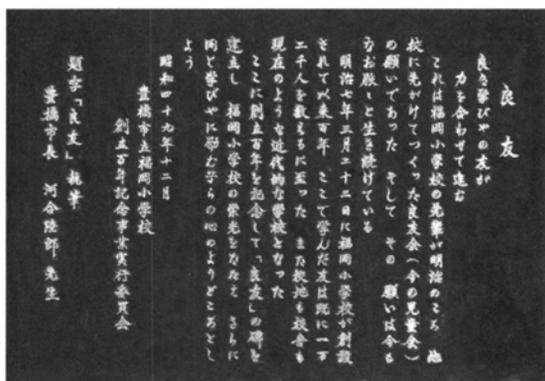
明治7年、正光寺に橋良学校が創立されてから100年目を迎える昭和49年12月8日、体育館に多数の旧職員、卒業生が参列して盛大に記念式典が挙行された。記念として、福岡100年誌、同窓会名簿、記念碑建立などの事業も行われた。



福岡100年誌、同窓会名簿



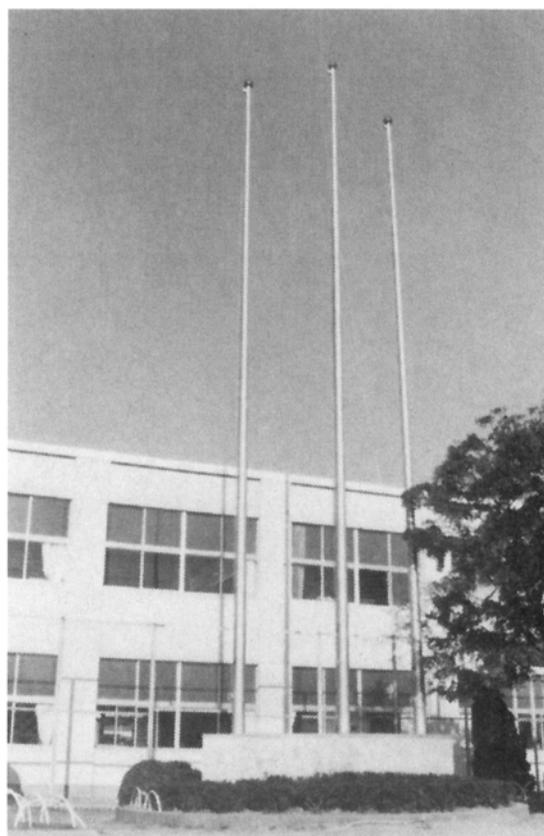
福岡小学校創立百周年記念碑



良友の碑文

### ●国旗掲揚塔の完成

昭和44年度、45年度の卒業記念品として、運動場北側に立派な国旗掲揚塔がつけられた。毎週月曜日には児童会役員によって国旗、校旗、青少年赤十字の旗があげられている。国旗に注目している時の子どもたちの目は生き生きと輝いている。この建設については校区の方々の多大な援助もあったそうだ。



国旗掲揚塔

## 6 百年祭以降

### ●運動場にナイター照明設備できる

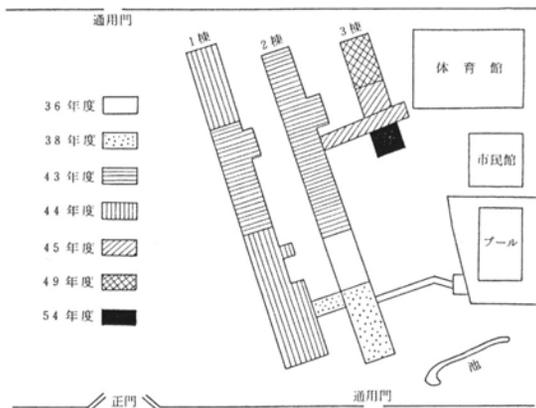
校庭開放が始められ、昭和51年に福岡小学校運動場にナイター照明が設置された。4月から10月まで練習やゲームが行われている。だれでも使用できるが、校区の親睦ソフトボールの方々がよく使用され、暑い夏の夜、家族そろって応援に訪れる人も多い。



ナイター風景

### ●鉄筋校舎の完成

昭和35年までは昔のままの日当たりの悪い木造校舎だったが、昭和36年に現在の二棟の一部に初めて鉄筋の新校舎4教室が竣工した。その後、昭和38年度、43年度、44年度、45年度、49年度、54年度に増築され、ほぼ現在の状態になった。



鉄筋校舎ができるまで

### ●講堂取り壊し

昭和7年に建設され、当時としては大変モダンな建築物だった。正面はアーチ造り、床は傾斜があり、内部は白壁で白亜の殿堂という感じであった。こんな立派な建物も新体育館完成によって姿を消すことになった。



講堂入口



講堂内部



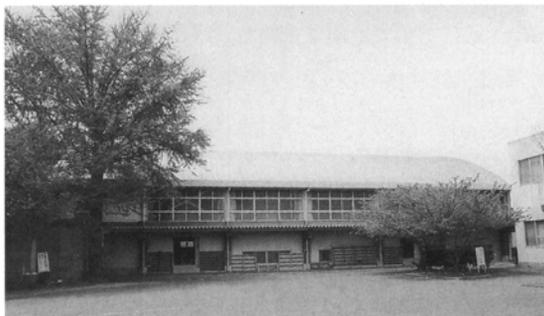
講堂正面

●**体育館建設**

これまでの学芸会や卒業式は、旧講堂で行われていた。学芸会は舞台が狭いので仮設台で広げ、行っていた。卒業式も卒業生、父兄、5年生が入場するといっぱいになるありさまであった。新しい体育館ができ、行事や体育の授業がゆとりを持って、できるようになった。



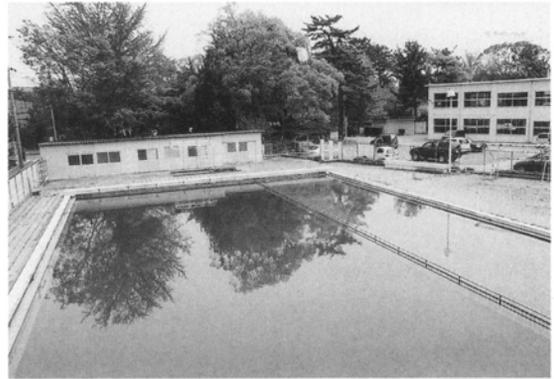
体育館竣工式



体育館全景

●**新プール完成**

昭和32年に建設されたプールは、南部地区の小学校では最初であり、オーバーフローやプール内に工夫をこらした独特のプールだったようだ。だから磯辺小学校の児童が泳ぎに来たり、市の水錬学校の会場となったり、教職員の水泳研修会場となったり、校内だけでなく広く使用された。ところがプールの老朽化と児童数の増加により、大規模プールが必要となり、昭和56年に市内最大規模のプール建設となった。

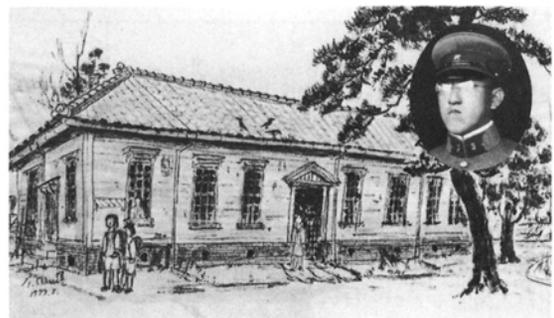


新プール全景

●**竹栄寮撤去**

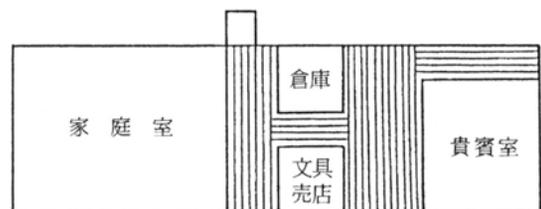
竹栄寮は、騎兵第19連隊の将校集会場だったが、竹田宮殿下が連隊長として勤務された時代に殿下の貴賓室として使用され、福岡小学校になってからは、戦前は高等科女子の教室、戦後は普通教室、その後家庭科室として使用されたが、昭和56年に撤去された。

竹田宮恒久王殿下は、北白川能久親王の王子として誕生。明治天皇第6皇女昌子様と婚姻。竹田宮家を創設。竹田恒和JOC会長は、殿下の孫にあたる。



竹栄寮全景

学校歯科医 白井暉二氏画（円内は竹田宮殿下）



竹栄寮間取り

### ●校区市民館できる

福岡校区民待望の市民館が、体育館東隣に完成した。昭和57年4月28日には竣工式と開館式が行われた。主に地域の人々の自主的な活動の場として利用されている。

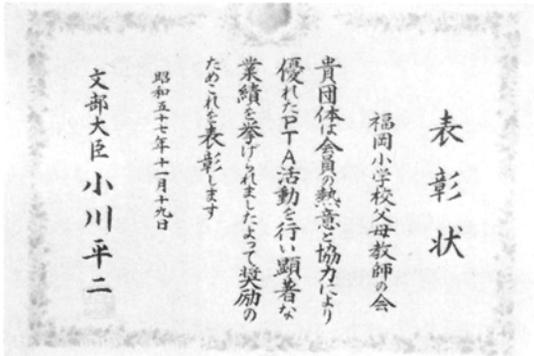


市民館全景

### ●PTA活動文部大臣表彰

PTA文部大臣表彰受賞報告会 (58.1.22)

本校PTAの多年にわたる活動と業績に対して、昭和57年11月19日文部大臣表彰を受けた。



PTA活動文部大臣表彰状

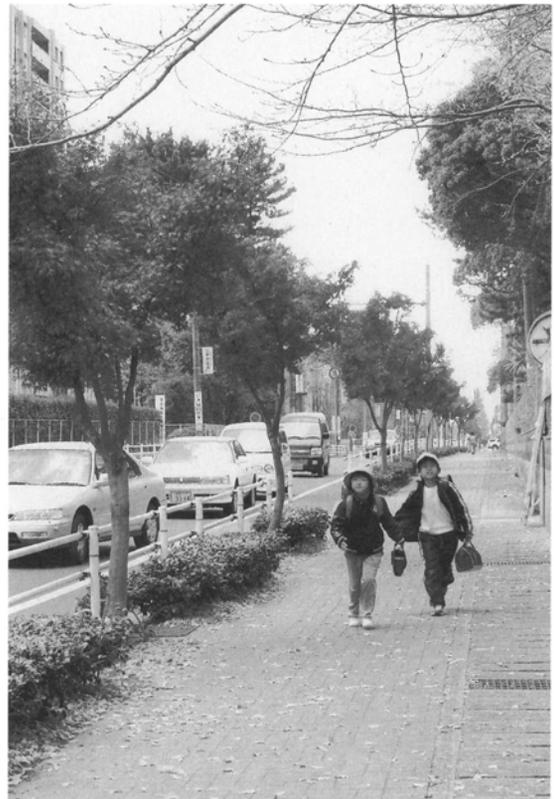
### ●中野小学校新設

豊橋南部地区の開発が進み、福岡小学校とその隣接校の磯部小学校・栄小学校の3校がそろって30学級以上の大規模校となった。そこで、この3校の過大化問題を解決するため、豊橋盲学校跡地と市営住宅の一部が敷地となり、昭和59年に校舎や体育館が建設された。そして、福岡小学校の小浜・中野地区の

380余名の児童が磯部小学校からの240余名、栄小学校からの10数名の児童といっしょに昭和60年4月から中野小学校で学ぶことになった。

### ●福岡小学校120周年を迎える(平成6年)

正光寺に始まって120年。記念事業実行委員会が組織され、さまざまな記念行事が進められた。北設楽郡田峰小学校との交流が始まったり、学校東側の県道の歩道が県土木の協力で、きれいに舗装され、そこに、子どもたちの描いた絵「インターロッキング」が6枚埋められた。校歌に出てくる「もみじ」が街路樹として植えられ、文字どおり福岡小学校の通学路として利用されている。これらは、同実行委員長で校区総代会長でもあった中野恵夫氏の強力な働きかけがあったからこそできたものである。



街路樹「もみじ」の色づく  
福岡小学校東側の通学路

## 第5章 氏神様とお寺

### 1 校区のお宮

#### ●橋良神社

祭神 たけはや すきのおのみこと  
 建速須佐之男命  
あまてらすめのおみかみ  
 天照皇大神  
とようけ ひめのかみ  
 豊宇気毘売神  
やちまた ひこのかみ  
 八衢比古神  
くなどのかみ  
 来名戸之神  
おおささのみこと  
 大鷦鷯尊  
いさは とみのみこと  
 伊佐波登美命

例祭日 10月第1土・日曜日

神事 ひのきばみこし とぎよ  
 桧葉御輿の渡御  
かけあんどん  
 掛行燈

芝居

木植神事



橋良神社本殿

由緒 橋良神社には祭神の数が多い。これはたくさんのお宮を合祀したからだ。合祀する前の当神社の祭神は建速須佐之男命である。だから、むかし須佐之男社とも言っていた。

『橋良村舊事蹟草稿』によると、須佐之男社を勧請した年は、貞治3(1364)年となっている。同草稿によると、その年に元野社を合祀したとある。元野社(祭神、伊邪那美命)は、須佐之男社のすぐ裏にあったとあるから、元野社を新しく造りかえ、祭神を新たに須佐之男命として、須佐之男社ができたとも考えらる。

だから、橋良神社の始まりは、元野社といっているのかもしれない。

同草稿によると、元野社については、次のようだ。

建久5(1194)年に、源頼朝が当社のため

に社領を寄進、その後、芳賀定行も高十石余の社領を寄進したとある。

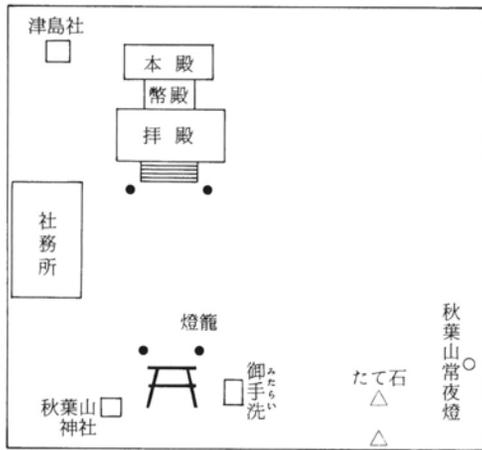
正治2(1200)年に安達藤九郎盛長が桧の苗千本を献上したことが、木植神事の始まりである。以上のことから、当社の始まりは非常に古いものと考えられる。

棟札でわかることは、文禄2(1593)年からだ。それ以前の棟札はない。その時に、お宮の一部を建てたとあるが、棟札からは、何を建てたのかわからない。

現在の本殿は大正2年に、拝殿は明治33年に建てられたものだ。なお、呼び名が橋良神社と正式に呼ばれたのは、大正2年からである。



文禄2年の棟札



境内略図

境内を入るとすぐ右側に秋葉山の常夜燈がある。文政7（1824）年の作で、もとは八幡社の前にあったものだ。明治24（1891）年の濃尾地震で屋根は欠け、火ぶくろもつぶされ、なくなってしまっている。



文政7年の秋葉山の常夜燈

拜殿の前には、燈籠が4つある。これは鳥居とともに明治33年に建てられたものである。また、拜殿の前には桧と杉が植えてある。これには、深いいわれがあり、それが『橋良村舊事蹟草稿』<sup>はしらむらきゅうじせきそうこう</sup>に書いてある。

正治2年に安達藤九郎盛長が桧苗を千本献上した時、桧と杉を並べて植えた。桧と杉はやがて大木になり、不思議なことにそれらの木の根元がひとつの木のようにいっしょになった。それで夫婦杉とも、陰陽合体の神木とも言われたが、現在はない。歌人でもある芳

賀吉雄氏は、祭礼のハッピーの絵を考案した。神社のすぐ近くに錦の小川が流れていた。ここには、秋になるともみじが絶えまなく流れ、それを見て、同氏は「流れもみじ」とたとえた。

明治33年の上棟式の時、氏子が着ておまつりしたのが始めである。



流れもみじのハッピー

本殿の北西に、津島神社がある。お参りすれば、長生きできると言われている。



長生きの神様と言われる津島神社

**神事** 豊橋神社誌によると、桧葉御輿の渡御、掛行燈、芝居の3つの神事がある。また『橋良村舊事蹟草稿』<sup>はしらむらきゅうじせきそうこう</sup>には、木植神事と桧葉御輿<sup>ひのきばみこし</sup>の渡御<sup>とぎよ</sup>とのことから、合わせて4つの神事があったことになっている。

桧葉御輿の渡御とは、おそらく木植神事と関係があると思われる。当社では、桧は神木とされて、それを御輿につけ、その御輿<sup>かつ</sup>を担ぎ、回ったのだろうと考えられている。

●小池神社

祭神 建速須佐之男命  
たけはや すさのおのみこと  
 天照皇大神  
あまてらすすめのおみかみ  
 大己貴命  
おお な むちのみこと  
 少彦名命  
すくなひこなのみこと  
 市寸島姫命  
いちしま ひめのみこと  
 応神天皇  
おうじんてんのう  
 伊佐波登美命  
い さ は と みのみこと

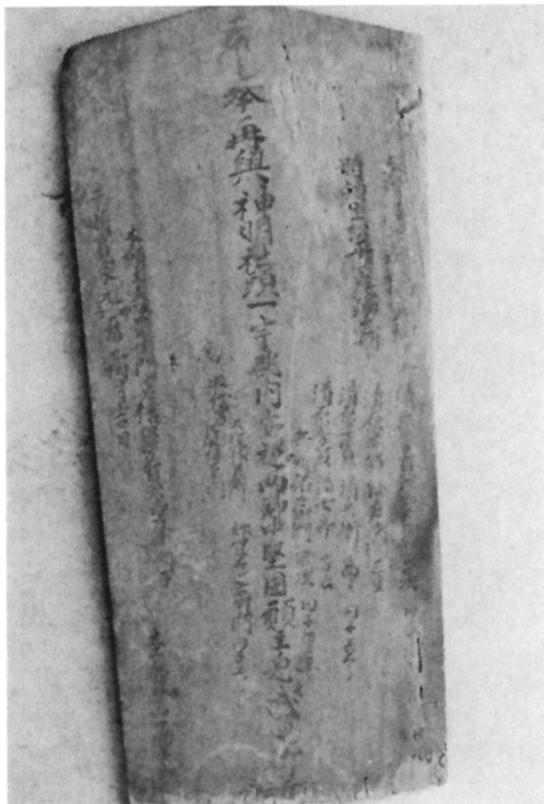
例祭日

10月第1土・日曜日



小池神社本殿

由緒 本社にある棟札で一番古いのは、元和9（1623）年のものである。祭神は建速須佐之男命（=牛頭天王）を祭っていた。



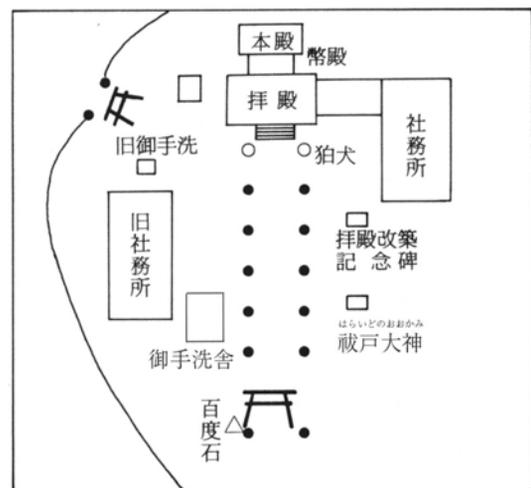
元和9年の棟札

明治42（1909）年から大正にかけて、たくさんのお宮が合祀され、祭神の数が増えた。

現在の本殿は明治42年に修理したもので、拜殿、幣殿は大正13（1924）年に造営にかかり、大正15年に完成したものだ。

さらに、平成16年には本殿の屋根を修理するため、遷宮の儀式が執り行われた。

まず最初に気づくことは神社がとても大きく、立派だということである。大きな拜殿、本殿、鳥居、長い参道、十数基もある燈籠、なかなか他の神社では見ることができない。



境内略図

また、大木が周りを囲み、いろいろな種類の木が繁り、規模の大きさをよけいに感じさせている。

鳥居の前の燈籠から拝殿の前の燈籠は12基もある。刻んである年号を見ると、2つを除いては、みな大正15年にできたものだ。鳥居もまたそうである。

このことから、大正15年は拝殿を含め、大がかりな合祀があったことがわかる。



南参道に沿ってたつ燈籠

参道に沿ってある燈籠の中に2つ、古いのが左右に分かれて置いてある。拝殿に向かって右側が文化13（1816）年、左が文化2年の作だ。西にある鳥居の前の燈籠も文化13年、文化2年のものである。

燈籠のどちらかの年がもとの八幡社（小池町西海戸）のものだ。もともと境内に一对になってあったものの一方がいたんだので、取りかえたということだろう。



西参道の鳥居

拝殿の軒下の部分にいくつもの額が掲げられ、額には「金的中」などと彫られている。これは、お祭りの日に、弓の大会があり、その時に、金的を射た人が奉納したものだ。この弓の大会には、町内のみならず市内、市外からも参加したそうだ。昭和の初めごろから始まり、昭和55年ごろまで続いた。



市外からの参加者もみられる金的中の額

その後、平成10年、西鳥居と御手洗舎を新設した。



新設した御手洗舎



小池神社の名物になっている大しめ縄

●照国神社

祭神

あまてらすすめのおおみかみ  
天照皇大神

例祭日

10月第1土・日曜日

元旦祭

1月1日



照国神社の神明鳥居と本殿

由緒 昭和2年11月天皇陛下（昭和天皇）が豊橋市に臨幸され、これを記念して伊勢神宮の御分霊を奉安したものの。

昭和21年に、富本町の鎮守の神として、照国神社の神明鳥居と本殿の払下げを受けて、現在地へ遷宮されたものである。

現在の拝殿は、昭和45年に、社殿は昭和54年に造営したものだ。

祭礼日には山車がひかれ、舞台では「童おどり」等が披露される。



福徳稲荷



山車奉曳



童おどり

本殿の北側には福徳稲荷がある。この由緒は、十三本塚の住人向坂代平氏は信仰心が厚く、稲荷山にある自分の土地に小祠を建て、商売繁昌の神として稲荷を祭祀していた。

大正2年現在の照国神社境内に鎮座していた若宮八幡宮が橋良神社に合祀されることとなり、その地にあった石燈籠、灯明台、手洗鉢と共にもらい受け、稲荷神社として奉祀したものである。

昭和3年福徳稲荷社祠及附属物件を富本町へ所有権移転を行い、現在まで奉祭している。

## 2 校区のお寺

### ●正光寺

創立

貞治3（1364）年

開山

勝安和尚

開基

芳賀兵部太輔高綱

芳賀伊賀守高貞

宗派

臨濟宗

本尊

釈迦牟尼佛



正光寺本堂

由緒 柱町には、芳賀という苗字の人がたくさんいる。その芳賀家の菩提寺が正光寺であるといわれている。『橋良村舊事蹟草稿』によると、次のようである。

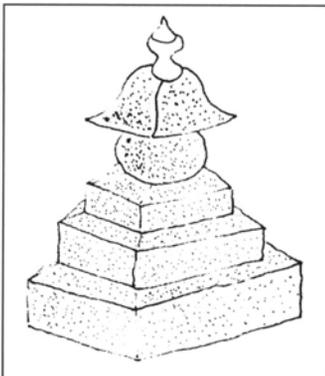
芳賀氏の遠祖は、野州宇都宮（栃木県）で一族は北条氏に仕え、その後、足利氏に仕えた武将の家柄だった。

芳賀高綱の時、鎌倉管領足利基氏と争いになり、貞治3年に息子高清、高貞らに鎌倉を攻めさせた。しかし、敗れてしまい、その上息子高清まで失ってしまった。

それで、高綱は、高貞とともに野州を退いて橋良の地に

移って来た後、この地に高清や亡くなった一族を弔うために寺を建てた。これが正光寺の始まりである。

そして、正光寺裏には、芳賀家代々の墓碑が



図のような形をしていたと言われる芳賀家の墓  
武士の墓の多くがこの形である

建てられた。芳賀高清の貞治3年からの代々の墓碑である。

しかし、その墓碑も、天明2（1782）年の大地震などにより、こわれてしまい一般の墓地に移された。

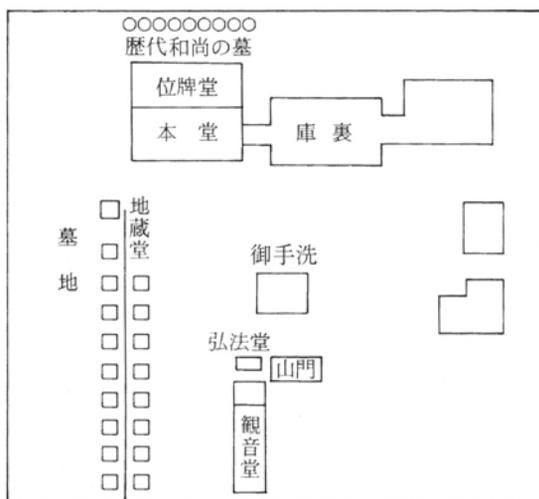
また、正光寺には、芳賀定行、本行、正

光寺を再建したと言われる彦坂英信（元は芳賀）の位碑が存在したが、昭和の豊橋空襲で焼けてしまった。今、正光寺には、芳賀系図があるが、これは正光寺の近くに住んでいた芳賀すま子さんが寄贈したものである。

なお、橋良神社の棟札には、小浜に最初に芳賀として住みついたという芳賀高重、正光寺を再建したと言われる彦坂英信の名が見られる。



橋良神社棟札



境内略図

山門の前の観音堂の中には、三十三観音があり、その他に町内にあるこのお堂に持ってこられた観音様や地藏様が数体ある。

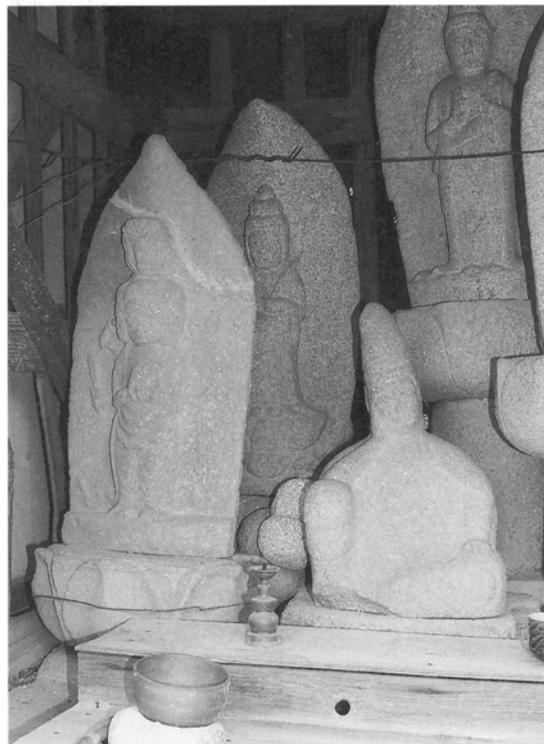
堂の中央にある「橋良の観音様」と呼ばれている観音様は、柱第一公園のところには錦葉山観音寺という古い寺があり、その跡地にあったものを、公園ができるということで正光寺へ持って来たものだ。



三十三観音

観音堂の左隅に那智観音と馬頭観音が並んで置いてある。

那智観音は、<sup>さぎさか</sup>鷺坂長士が造らせたもので、



那智観音（右）と馬頭観音（左）

今の向坂一族の繁栄を祈って造られたそう  
だ。

山門を入れて行くと、左に弘法堂があり、芳賀吉雄氏の書いた御詠歌がかけてある。この正光寺には、芳賀吉雄氏が明治21年4月にまとめた「橋良村舊事蹟草稿」があり、大切に保管されている。



弘法堂

●潮音寺

創立

不詳

開山

不詳

開基

きゅうおく  
休屋和尚

宗派

曹洞宗

本尊

薬師如来



潮音寺本堂・観音堂

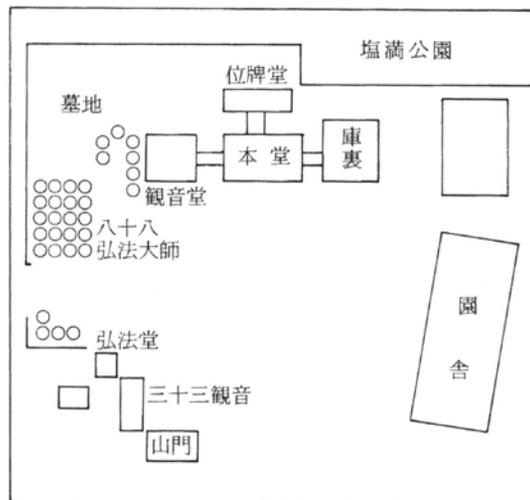
由緒 潮音寺と言えば、「観音様」を思い出す。観音様は、言い伝えにもあるようにとても有名な観音様だった。しかし、豊橋空襲により焼けてしまった。

寺の記録によると、次のようである。

曹洞宗に改めたのは、寛文6（1666）年の時で、龍拈寺の休屋和尚を招いて、開祖とした。改宗前からも当時は有名であり、時の領

主とのつながりがかなりあったようである。

なお、現在の観音堂は昭和44年、本堂は昭和29年に建てられたものだ。



境内略図

山門には、仁王様がいかにめしく立っている。これは、明治になって修理されたものであるが、ほとんど昔のままだそうである。像の内部には「元禄十二年九月吉日京都寺町三条大仏師齊藤左近法橋浄慶作」と刻んであった。このことから、制作年月、制作者が判断できる。

1590年……池田輝政より良材をいただき寺を再建する。また、観音不動多門三尊を修理する。

1675年……小笠原長矩より燈油料の田園を  
1677年 いただく、

1681年……小笠原長祐より印署をいただく。  
また御自筆の普門品（お経）を  
いただく。

1698年……久世重之より免状継目をいただく。

1712年、1730年、1792年にも同じ免状継目をいただく。

山門を入ると、正面に観音堂がある。戦前は、前にも述べたようにとても有名な観音様があり、旧暦7月9、10日観音祭りが行われてきた。

祭りはとても盛大で、境内の中から外遠くまでぎっしりと屋台が並び、夜になると芸者さんたちが、お参りに来て一晩中にぎわったそうである。



仁王様がまつられている山門



三十三観音

ふりわけ仏は道しるべと道中の安全を兼ねたものである。寺には、2体あるが、そのうちの1つに、右・おくがうり、左・小まつ原道と刻んであった。



ふりわけ仏

この境内のたくさんのお仏像には驚かされる。三十三観音、八十八弘法大師、ふりわけ仏、地藏様などがあり、その他にも燈籠がある。

その中でも西国三十三カ所の巡礼の記念の石碑やふりわけ仏がたいへん珍しいものだ。西国三十三カ所の碑は元禄16(1703)年作である。



西国三十三カ所の石碑



貞享(1684~1688)年間作の燈籠

# 編集後記

豊橋市制施行100周年を記念して、豊橋市総代会は豊橋市51小学校校区に「校区史」を発刊するよう依頼。これにより、福岡校区も編集を始めました。

総ページ50枚の中に、校区の自然・歴史・文化・教育等をまとめてほしいとの要望がありました。

資料収集の中で、福岡小学校100周年・120周年を記念して発刊された記念誌や昭和60年に小学校社会科の副読本として発刊された校区誌「福岡むかしと今」等を基本として、「常体」の文章にかえて作成することに決定しましたが、この22年間の変化は大きく、現在の写真に替えたり、また、なくなっているものもあり、調査に時間をとられました。

この「校区史」が、悠久の歴史の中で先人が築いた文化や自然を理解することにより、地域の人々に地域のことを知る「郷土学習」の一助となり、地域の人々の連帯を強め、校区の発展に生かされていくものとなれば幸いです。

最後になりましたが、編集にあたり、資料提供や、御指導をいただいた多くの方々に感謝申し上げます。

平成18年6月15日  
福岡校区「校区史」編集委員会

## 福岡校区史編集委員

### ■福岡校区史編集実行委員会

委員長	杉浦 弘一			
副委員長	青木 禎司			
委員	伊藤 千尋	外山 孝	福田 弘之	
	山口 栄次	林 立郎	斉藤 茂	
	鈴木 健	中野 恵夫	大竹 未英	
	伊藤 甫	寺部 莊平		

### ■サポーター（豊橋市役所職員）

平井 康博      高橋 誠      奥平 将

### 校区のあゆみ 福岡

平成18年12月25日発行

編集 福岡校区総代会  
福岡校区史編集委員会  
発行 豊橋市総代会  
印刷 共和印刷株式会社

R2100  
印刷会社名にR2100の再生紙が  
使用されています。

PRINTED WITH  
SOYINK™  
Soybean Ink





2006年  
市制100周年  
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋